

ラブライブ!サンシャイン!!～9人の輝きの向こう側～

につしんぬ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ふとしたきっかけで内浦に引っ越すことになった高嶺望幼少期から毎年一緒に遊んでいた果南、ダイヤ、鞠莉と再会し、過ごしていく

そして、ひよんなことから伝説の輝きを目指していく物語

目 次

Step. 0 プロローグ

昔の思い出はこれから日の日常に
日常はいつも喧騒のように
聖なる祈りは瞬く間に
結成・元祖浦の星スクールアイドル
目指せ東京！

未熟なわたしたち

決意と想いとこれから

Step. 0.5 残された想い

堅い想いはダイヤモンドのように
揺らぐ想いは波のように

望んだ願いは高くて遠く

Step. 1 輝きを目指して

あの日見た大きな輝き
海の音色は切なく、キラキラと
初めの一歩は大好きな気持ちで
素直な気持ちで奏でるメロディー
向き合うのは自分自身の気持ち

122 115 105 97 89 80 74 67 59 48 39 33 24 11 1

Step. 0 プロローグ

昔の思い出は、これから日常生活に

懐かしい思い出が夢に出てきた

「君たちは誰？」

思えばこの時がきっかけだった

「ピギイ！だから止めましょーと」「どうするのー？」

「えつと、えつとハグ！」

「ハグ？」

「うん、ハグしようつ？」

「いいよ！」

「望?ご飯よー?あら?あなたたちは確か
黒澤さんと小原さんのところの?」

「ピギツ!は、はい!」

「お、お邪魔してまーす」

「松浦果南つていいます!」

「あら、えらいわね、でも今度はちゃんと
玄関から入つてほしいかな?」

「「「」めんなさい…」」

「」」」じゃよくあることだと思つた

「お母さん」

「どうしたの?」

「ご飯食べたら、一緒に遊んできてもいい?」

「いいわよ、暗くなる前に帰つてしまなさいね」

「やつた!ねえ?ご飯食べ終わるまで待つて!」

その時はすごい勢いでかきこんだのを覚えている

そこで目を覚ました

「んつ…」

「あら、望。ゆっくり寝れた?」

「うん、後どれくらいで着く?」

「んー、後1時間ぐらいかな」

「分かった」

後1時間ぐらいなら寝るのももつたいない
携帯でアプリでもやつてよう、と思つたとき

「夢でも見たの?」

「へ?夢?」

「そ、うよ、あなた寝言でハグ?なんて言つてたわよ」

寝言にまで現れたのか

「うん、昔のことをちよつと」

「昔とい、うと果南ちゃんたち?」

「うん。初めて会つたときのことがね」

「また会えるとい、いわね」

「すぐにでも会えるでしょ、いつも通り」

そう言い残してまた眠くなつてきたので寝た
目を覚ましたらもう幾度となく見た母の実家であつた

「お父さんとお話ししてるから望は外に出てなさい」
なーんて言われて追い出されたので
適当にほつつき歩いてる。東京と違つて
ここは景色が綺麗だ。夜になると星も綺麗に見える。
なんて思つてたら

「のぞ……む？ 望！？」

「果南？」

「うん！ わあ久しぶりだ！ 鞠莉とダイヤに
連絡しなきゃ！ あつ！ ねえ？」

ねえ、といいつつ両腕を大にして広げている
例の合図なのであろうが、中学3年生
それなりに気を使うわけであつて：

「果南？ 駄目だよ。 そうやつて誰彼構わず
ハグしようとするのは。 鞠莉やダイヤならまだしも
一応、男の子なんだから俺は」
「もう…昔はあんなにやつてくれたくせにー」
「昔は昔、今は今。人は成長するの」
「…ヘタレ」
「うるせえ！」

なんて言い合つていると

「果南さんではありませんか
こんなところで何をしているのです?
それに隣にいる方は…もしかして?
「うん！ 望だよ！」
「久しぶり、ダイヤ。相変わらずのお堅い話し方だね」

「望さん!? あなたって人は! 久しぶりだというのに!」
「わーかつた、ごめんごめん。黒澤家の跡取りだもんな」

ダイヤもダイヤで相変わらずでよかつた

「ところで望さん。例のアレは手に入りまして?」

「例のアレ? あー、アレね。もちろん!」

「つつつつつつ!!! 観賞会ですわよ!」

「よしきた! この後!」

「この後はまだ習い事があるので夕方以降ですわね」

「じゃあ夕方ダイヤの家行くね! ところで果南? 鞠莉は? ここまで来れば今日のうちに鞠莉にも会いたい

「2人が話してる間に連絡しておいたよ
もうすぐ来るんじゃないかな?」

といつた矢先、いかにも高級そうな車が
俺たちの側に停まり、後部座席のドアが勢いよく開く

「ノゾムーーー!! 会いたかつたわーーー!」

「よっこいしょ、久しぶり鞠莉」

勢いよく抱きついた、果南に

「なんで私は果南に Hug してるのはかしら?」

「それはこっちが聞きたいよ、鞠莉」

「いや普通に考えて俺が避けたからでしょ」

「よくまああの距離からの

あのスピードを避けれますわね」

なんて言いつつ全員揃つた。揃つたところで

「あ、そうだ。俺、みんなに言わないといけないことが」

どうしたの？何かあつたの？と言わんばかりに
3人とも首をかしげる

最初に口を開いたのは鞠莉だ

「あら、もしかして毎年 summer じゃなくて
こつちに完全にお引っ越しトカ？」

相変わらずの勘の鋭さである。

「うん、まあそういうこと。色々あつて
夏休み明けてからこつちの学校に通うよ」
「やつた！じゃあ毎日ノゾムに会えるのね？」
「その前に鞠莉さんあなた宿題は終わりましたの？」
「そうだぞ、宿題終わつてない悪い子には
毎日会つてあげないぞー」
「ははっ、残念だね鞠莉」

「そういう果南こそどうなのよー！？」
「え？私はー、ほらー、あれだし？」

「一体どれだ。悪い予感しかしない

「ダイヤ」

「仕方ありませんわね…」「2人とも」

俺とダイヤの声になにかを察したのか
鞠莉と果南の顔がひきつってる。

「夕方から宿題するぞ！（しますわよ！）」

内浦の町に2人の悲鳴が響いた

「じゃあ俺が果南、ダイヤが鞠莉を見るつてことで」「ノゾムー！なんでマリーを見てくれないのー！？」

「俺がみるとすぐふざけるだろ？ダイヤが見たほうが効率がいいの。そんなに俺と遊びたかつたら

宿題終わらせてください！」

「もう、こうなつたら意地でもダイヤの目を搔い潜つて…」

「鞠莉さん、あなたは宿題を終わらせることを考えなさい」

全く放つておくとなにしでかすか分からなからな…
さて、こつちはこつちで問題だから早くしないと

「さて、じゃあ果南。最初に質問するよ？」

「えつと、な、なにかなーん？なんて。」

「夏休みもおよそ半分終わつてます」

「はい」

「なのに残つてるというより1つも手を付けてないのは
どういうことかなーん!?」

残つてるとか言うレベルではない量が机に敷き詰められていた

「ひいひい！ごめんなさいいいい」

「時間は……あつたよね？」

「あ、ありました…」

「はあ…まつたく、今日で半分は終わらせるぞ」

「え？この量の半分を今日で？」

「果南、体力には自信あるだろ？」

大丈夫大丈夫、俺もいるんだし終わる終わる！」

部屋に果南の悲鳴がこだました

「もうダメ、無理い！」

「はいはい、あとちょっとだから。」

「終わつたらハ g…」

「ハグはしないけどホットケーキ作つてあげるから」「むう…頑張る」

何故か俺のホットケーキは評判がいい

果南だけじゃなくて、鞠莉とダイヤにも

「果南だけずるいー！マリーもノゾムの

s o d e l i c i o u sなホットケーキ食べたいわ！」

「分かつた分かつた、鞠莉にも、それにダイヤにも

作つてあげるから頑張ろうな」

「やつた！」

「ありがとうございますですわ」

「よしつ、これで完成つと！」

やはり我ながらいい出来である

「んく、やつぱいい匂いだね」

「ほい、蜂蜜とバターとチョコソース」

「「やつた！」」

みんな美味しそうに頬張る。

ダイヤに2人を任せて沼津のほうまで
材料買いに出てつてよかつた。

「「「（）」ちそうさまー（ですわ）」」

「ほい、おそまつさまでした。そろそろお開きにしようか」

「そうですわね、もう夜も遅いですし」

「ところでダイヤ」

「なんですか？」

「観賞会、いつにする？」

「明日の夕方でもいいですわよ。

お昼は生憎、習い事がありますので」

「わかつた、じゃあ夕方までに果南と鞠莉の宿題を片付けて夕方そつち行くね」

「分かりました、家の者に伝えておきますわ」

よし、じゃあ帰りますか

これから毎年夏だけだったことが

日常になると思うと、少しワクワクするかな

日常はいつもの喧騒のように

「終わったあああ

「お疲れ果南、ホットケーキ出来るよ」
「やつた！」

夏休みも最終日、やつと果南の宿題を
終わらせることが出来た。

「んー、やっぱ望のホットケーキはおいしいね！」

「ホットケーキだけ讃められても嬉しくないんだけど…」

「じゃあ明日はわかめ一杯のお味噌汁ね！」

「作るのかよ?!いや、いいけどさ!」

毎年そうだつたのだが果南はよく
俺の作るご飯を食べたがる。作る身からすれば
大変喜ばしいことではある

「あつ！明日といえば！」

「どうした？」

「望、明日からどこの学校に通うの？」

「一緒の学校」

「…へ？」

一瞬沈黙が走る

「だから、同じ学校。果南と、ダイヤと鞠莉と」

「本当!? ジャあ毎日学校でも会えるんだね！やつた！」

「あ、ダイヤと鞠莉には内緒な。驚かせてやりた…つてうおつ」

不意打ちで果南にハグしにくるが
間一髪のところで避ける。危ない危ない

「ちえつ、避けられたかあ」

「予測は可能だつたよ、昔からそうだもんな。」

「ヘタ r 「ヘタレ言うな」」

油断も隙もありやしない

「そつかあ、鞠莉とダイヤ驚くだろうなあ」

「だろうね。あ、皿片付ける」

「ありがと、もう日が降りてきてるしお開きにする?」

「そうだな、果南の明日の準備確認して

問題なれば帰ろうかな」

「ちよつと、私つてそんなに信用ないの一?」

「宿題を最終日で一気にやろうとしてた人に

信用なんてありません」

「ちえつ、分かりましたよーだ」

そうやつて明日の準備を行う

宿題全部詰めた、その他必要なもの詰めた、よし確認完了

「よし、じゃあまた明日な」

「うん、また明日ね」

そう言つて別れる。

明日のダイヤと鞠莉の驚く顔が楽しみだ

「転校生?」

「そ、転校生」

「めずらしいですわね、この時期に転校生だなんて」

「男の子? 女の子?」

「男の子らしいよ、私もさつき職員室通つたときによく聞こえたぐらいだから詳しくは分かんないけどね」

「もしかしたらノゾムが転校してきて surprise! かもしけないわね」

「あはは、だとしたら嬉しいね」

キーンコーンカーンコーン

「よーし、席についてー。さつそくだけど今日から
転校生がやつて来る。仲良くしてやつてね
よし、じゃあ入ってきて！」

1人は顔がひきつってて、1人は満面の笑みを浮かべてて
1人は、その2人を見て、してやつたりと
もちろん俺もしてやつたりの顔だが。

「東京から引っ越してきました、高嶺望です
短い間ですがよろしくお願ひします！」

「果南さん、あなた知つてましたの？」

「うん、知つてた。昨日宿題見て貰つたときにな
「まつたく、あなたという人は…」

「いやー、俺が入ってきた時のダイヤの顔！」

自己紹介の場じやなれば写真撮つてたぜ」

「望さんまで、あなたという人はあああ!!」

「まあまあダイヤ落ち着いて、せつかくの硬度が〇よ?」

「鞠莉さんまで…くやしくないんですの!?」

「どうか硬度〇とはなんですか!?」

「んー、くやしいけどノゾムが来てくれて
h a p p yな気持ちの方が強いかな?ダイヤはh a p p yじゃないの?」

「そ、それは…嬉しい…ですけど。」

「こうやって毎年会つてきたけど

会うたびに嬉しい気持ちになるのは俺もだ

「まつ、なにはともあれようしな!」

「「よろしくね」」

「…ようしくですわ」

季節は進んで秋も終わりかけ、冬になろうとしてる時期

「寒い…」

「おはよう望、どうしたのその格好？」

「おはよう果南、いや…寒い」

「寒いって、そんなに？」

「東京も寒いけど内浦も十分寒い、というか
俺がただの寒がりなのもある」

「あー、なるほど」

内浦の冬？も十分寒い。今まで夏にしかいなかつたから
結構予想外である。そんなこんなで果南と話してたら…：

「Good Morning ノゾム、果南。

あら、ノゾムどうしたのその格好

まるでロシアにでも、住んでそうな格好ね？」

「おはよう、鞠莉。ロシアの人は

もつと暖かそうな格好してるとと思うよ」

ちなみにカイロを背中に貼つてある

「おはようございますですわ、みなさん」

「「おはよう（Good Morning）ダイヤ」」

「望さん、あなた今のうちからその格好で

真冬をどう過ごすつもりですか

「もつと着込む、カイロ増やす」

「それ以上着る気ですか!?」

「着るよ！寒いの嫌だもん！」

「もん！じやありませんわ！」

寒いのはほんとに嫌だ

「あーあ、始まつたよ夫婦喧嘩」

「誰が夫婦だ（ですか！）！」

「誰がどう見ても夫婦だよ、2人とも」

俺とダイヤは些細なことで言い合いになる
大体の始まりはダイヤから始まる。

この前は「糖分の取りすぎですか！」から
始まつたつけな。あまりにもの多さに
果南と鞠莉からは夫婦喧嘩と名付けられて
日常茶飯事のようになつて。ただ…

「まつたくあなたという人は…

そんなに寒いのならしかたありませんわ」

長いこと続けてるが必ずダイヤから折れる。

「ほんと、ダイヤはノゾムに弱いわねえ」

「うんうん、毎日見てるけど望から折れたことないよね」

「確かに、俺が折れたことはないな。なんでだ、ダイヤ？」

「べ、別になんでもありませんわ！」

顔を赤くしてそっぽ向くダイヤ

「どうしたダイヤ？風邪か？季節の変わり目は
風邪引きやすいから気を付けろよ？」

あれだつたら1枚服貸そうか？」

「い、要りませんわ！まつたくあなたという人は…」

なんだ要らないのか。

そういえば冬といえば…

「鍋をしよう！」

「あら、ノゾム。藪から棒ね。」

「冬といえば鍋！うん！鍋しよう、そうしよう」

「いいね、うちに道具は置いてあるからしよう！」

「あら、果南も乗り気だね。じゃあ材料は

マリーが調達するわっ！」

「いや、鞠莉それだけは止めてくれ…」

「W h a t , s !? なんですよノゾムー！?」

「当たり前じやないですか鞠莉さん！」

あなたが食材を選ぶと単価が高くなるのですわ！」

そう、鞠莉に食材を任せるとおよそ一般人では手の付けられないような高価すぎる物を持つてくるのだ
しかも本人曰く、「え？普通じゃないの？」らしい

「ダイヤの言う通りだ、鞠莉。食材は

みんなで買い出しに行こう。そのほうが楽しいだろ？」

「もう…ノゾムが言うなら仕方ないわね。」

「よし、じゃあ今週の休みにやるか！」

「じゃあいつも通りうちでやる？」

「そうだな、いつも通り果南の家だな」

（その日の週末、とあるスーパーにて）

「だから！鍋に入れる肉といえば鶏だろ!?」

「ぶつぶーですわ！鍋といえば牛！鶏肉なんて邪道の邪道！」

「また始まつたよ…」

いや、鍋といえば鶏でしょう、ね？

「なんで鶏の良さがわからないかな!?名前だけじゃなくて
頭ん中まで硬度10かよ!?」

「頭の中まで硬度10とはどういう意味ですか!?望さんこそ
牛の良さを分かつてないのでなくして!?」

「こうなつたら…」

「果南！」

「鞠莉さん！」

「「どつちー！（ですかー！）」」

「こうなつたら2人に聞くしかない

「はははー、私は魚かな」

「マリーはラム肉かなあ」

「「こ」の2人に聞いたのが間違いだつた（でしたわ）」「

「仕方ありませんわ、鶏にしましようか」

「この際だから両方入れたらいいんじやないかな」

「お、果南それいいね。せつかくなんだしみんなで楽しめるようにしなきやな」

「まつたく2人とも、学校じやないんだからほどほどにね」

「「すみません…」」

果南のおかげで鶏牛論争は終わつた。

「「「いつただきまーす!」」」

ちようどいい感じに煮えてきた。

「んー、うまい! やつぱ冬は鍋だね!」

「正確にはまだ冬ではありませんが」

「まあまあ2人とも、あんまり夫婦喧嘩してると冷めちゃうよ」

「だから夫婦じやない! (ですわ!)」

「ほんと、2人とも息がピッタリね」

合わせたくて合わせてるわけじゃないんだがな

「そういうえば、3人とも高校はどうするんだ?」

「3人とも浦の星女学院に通う予定ですわ」

「望は…やつぱり沼津のほう?」

「まあそうなるね。さすがに女子高には入れないでしょ」

「ノゾムがいいのなら小原家の権限を使って共学に…」

「しないの、鞠莉。気持ちはうれしいけど会えなくなるわけじやない
んだからさ」

「もう…Good Ideaだと思つたのにー」

一生会えなくなるわけじやない、このひと時が

過ごせれば、それで問題ないのだ。

「よし、しんみりした話は終わり！メの雑炊つくるぞ！」

「なんですか？鍋のメはうどんが定番でしょう！？」

「はいはい、両方すればいいよ。先にうどんね」

いつものが始まる前に果南が止める

鞠莉は物足らなさそうな顔をしている

「仕方ない（ですわね）」

ああ、お願いだからずっと続いてほしい。この日常が

聖なる祈りは瞬く間に

「やはりこたつは暖かい…」

冬といえば炬燵にみかん、せつかくの冬休み
炬燵で堕落せずどう過ごす、少し寝ようかな
と思つてたその時

p r r r r :

果南からだ、どうしたんだろう？

「もしもし、果南？どうした？」

「あ、望！おでかけしよつ！」

「断る、寒い」

プツツ…

よし、これで俺の炬燵ライフは守られ…

ピーンポーン！

まったく、誰だこんな昼間に

「勧誘なら間に合つて…「お邪魔しまーす！」

つて果南!」

閉める前に玄関に入られた!?
くそつ！これでは逃げ場が！

「普通に電話するだけじゃ切られると思ってね
先に対策しておいてよかつたよ。さて、望？」

どうやら拒否権はないらしい

「お出かけ、しよう？」
「…はい」

どうやら俺は、松浦果南という女に弱いらしい

「寒い」

「もー、望つたらさつきから寒いしか
言つてないじやない」

「事実なんだから仕方ない、というか…」

「んー？どうしたのかなん？」

「なんで2人なの？」

そう、2人なのである。

いつもならダイヤと鞠莉もいるのだが

何故か今日は2人なのである。

「まつ、たまにはいいじゃない！」と言いつつ

もうすぐクリスマスじゃん？だから鞠莉とダイヤに
クリスマスプレゼントを買おうと思つてね」

「俺を連れてくるつてことは俺へのはないのかな？」

ほんとになかつたらショックだが…

「いや、望のもちやんと用意するよ。ただ…」

「ただ…？」

「望のだしギリギリでもいいかなつて！」

「俺の扱い雑ー！？ひどくない！」

いや、まあいいんだけどさ、用意してくれるだけ嬉しいよ
「そつか、まあ楽しみにしておいて。」

「おう、そうだな。てことはクリスマスパーティー？は
やるんだ。」

「うん、毎年3人でね。でも今回からは望も参加だよ？」

てことは3人分のプレゼントが必要つてことか…

「果南は何か欲しいもの、ある？」

「ふえつ？な、なに突然？」

「いや、下手に買うより欲しいもの聞いて
買ったほうが確実かなつて」

「あー、なるほどね。望が選んだものならなんでもいいよ」

「と言われてもなー…」

「ダイヤと鞠莉もきっとそうだよ、望からなあ
きつとなんでも喜ぶよ」

「そつか、じやあ当日までに考えておくよ」

こうして日は過ぎ、時は流れ

「「「メリーカリスマス！（ですわー！）」」

場所はホテルオハラの最上階の一室
鞠莉から迎えに行くからねと連絡が来たので
まさかとは思つたが…

「どうか地味にこのホテル入ったの初めてだ」

「まあ ch i l d のときは外で遊ぶことが多かつたからね」
さすが小原グループである。噂には聞いていたが

ちなみにプレゼントは果南からマグカップ、ダイヤから
明らかに高そうなボールペン、鞠莉からは
ホテルオハラの印が入ったお椀を貰つた

「さて、後は望さんだけですわね」

「ノゾムからはどんなw o n d e r f u l なプレゼントが

貰えるのかしらっ!?」

「俺からはこれかな」

差し出したのは3通の手紙

「手紙…を出すような行事でもないけどさ

それでも3人には感謝の気持ちを伝えなきやつて
「手紙…にしてはやけに膨らんできますわね」

「あー、それは中にね」

「あら、シユシユね。しかも3人とも色違い！」

「うん、3人に合いそうな色をそれぞれ選んできただ

あ！手紙は俺がいなきときに読んでね！恥ずかしいから！」

果南には緑、ダイヤには赤、鞠莉には緑

それぞれ3人に合いそうな色を選んだ

「Wonderful!! 大事に使うわ！ノゾム！」

「ええ、大事にさせていただきますわ」

鞠莉とダイヤにお礼を言われてる中

「果南？どうした？もしかして気に入らなかつた？」

「あら、果南つたらわがままねつ」

何故か黙つてる果南を鞠莉が冗談ぎみに茶化してたら…

「いや、その…嬉しくてどうコメントしたらいいのか分からなくなつて…」

「あら、そうだつたの？でも果南、そういう時はありがとうだけでいいのよ？さつきの果南の言葉のせいでノゾムつたら嬉しくて顔赤くしてうつむいてるんだから！」

嬉しくて言葉がでないなんて

そんなこと言われたら嬉しいに決まつてゐる

「そうなの？望？」

「待つて、こつち見ないで」

「あら、ノゾムつたら意外と sh yなのね！」

「だー、いいからケーキ食べるぞ！頑張つて作つたから！」

「そうですわね、頂くことにしましよう

あまりからかつても、かわいそうですし

「じゃ、じゃあいただこう！いただきます！」

初めての4人のクリスマスパーティーは成功？に終わつた。

「望ー？果南ちゃんが迎えにきたわよー！」
「わー！ちょっと待つててもらつて！」
「まつたく…ごめんね果南ちゃん」
「いえいえ、私も少し早く来ちゃつたですし」
「ふう…お待たせ果南」

「まつたくあんた女の子待たせるのはダメよ」

「分かつてるつて…じやあ母さん行つてきます」

「うん、言つてらつしやい。果南ちゃん望をよろしくね」

「はい！行こつ望！」

もうすぐ年が明ける。

4人で初詣だ

「鞠莉とダイヤは現地だつけ？」

「うん、日付が変わるまでには間に合うつて言つてたよ」

「そつか、なら大丈夫か」

「それでき、望。何か言うことない？」

果南が少し顔を赤らめてこちらをみている

「んー…あけましておめでとうはまだ早いし、今年もお世話になります？」

「望に期待した私が馬鹿だつたよ…」

なんて言いながら他愛ない会話をすると

「果南さんに望さん待ちくたびれましたわよ」

「もう2人ともt o o l a t e よ！」

ダイヤと鞠莉はもう来てたみたいだ

「望さん、果南さんになにかしまして？」

「ん？なんで？」

「なんでつて…果南さんがふてくされてるのに気づかなかつたんですの？」

「え？ そうなの？ 全然気づかなかつた」

全く気づかなかつた。返事はいつもよりそつけない感じはしたが
「はあ…まつたくあなたという人は。まあいいですわ早く並びますわ
よ」

ダイヤの一聲によつて果南も鞠莉も移動を開始する
なんだか腑に落ちない

「まだ並ぶの…」

「あらノゾムもう疲れちゃつたの？マリーが癒してあげようか？」

「けっこーです」

「ノゾムつたらひどーい！」

「鞠莉さん！あんまり騒がないでくださいますか。周りの方に迷惑ですわよ」

「むうーダイヤの硬度10！」

「んーまつ！あなたという人は！」

「ほらほらダイヤ、騒がないの」

鞠莉に続いてダイヤまで騒ぎかけたところを果南が止める

「ねえ望、もう少し？」

「ん？あと1分ぐらいかな」

「あと1分!?早くカウントダウンの準備しなきゃ！」

「いやさすがに早すぎるだろ…」

きつと近づいたら周りの人も数え始めるから
そこに合わせればいい。

「あと30秒、今年もやり残したことはないか？」

「例えあつたとしても30秒じやどうにもなりませんわ」

「確かに。…ありがとう、3人とも」

果南、ダイヤ、鞠莉は笑顔で返す。なにを今更つていう顔だろうか

なんて思つてたら周辺でカウントダウンが始まる

5・4・3・2・1：

「「「あけましておめでとうござります」」」

「今年もよろしくね、果南、ダイヤ、鞠莉」

「こちらこそよろしく、望」

「こちらこそですわ、望さん」

「ノゾムこそよろしくね！」

新年1発目の挨拶を終えるころには

賽銭箱のところにたどり着いた

「望は何をお願いするの？」

ふいに果南に尋ねられる。と言つてもすでに決まつてゐるのだが
「家族の無病息災と、果南、ダイヤ、鞠莉とずっと仲良くなれますよ
うについて」

「ふふつ、望らしいね」

「なんだよ、俺らしいって」

「なんでもないっ！」

果南、ダイヤ、鞠莉は内浦でできた最初の友達

大事にしたいのは普通である

「でも高校からは別だもんね」

「果南は心配性だな、別に一生会えなくなるわけじゃないんだから
放課後でも休日でも会えばいい。また4人でさ」

「そうだね、望の言う通りだね」

「そういうこと。ダイヤと鞠莉のことちゃんと見ててね
何してかすかわかんないからさ」

「ふふつ、そうだね」

きつと4人で集まればまたいつも通りの日常がある
ちよつとだけ少なくなるだけ、今はただそう思いたい

結成・元祖浦の星スクールアイドル

果南、鞠莉、ダイヤが浦の星女学院に入学し
望が沼津の高校に入学してしばらくがたつた

「S c h o o l I d o l ??」

「ええ、スクールアイドルですか」

「ほら、浦女って今廃校の噂が流れてるじゃん?
何か出来ないかって話してて、それなら
スクールアイドル始めよう! って話になつたの」

スクールアイドル

5年前のラブライブ開催をきっかけに
広がった学校でアイドル活動をするというもの
初代優勝グループはA—R i s e

第2回優勝グループは今や伝説のスクールアイドルと
呼ばれているμ, sである

「U m m : マリーにはキラキラで可愛らしい

アイドルなんて似合わないわ。もつと

パンクでロックな方が私には合つてるもの」

「えー、鞠莉は可愛いしスタイルいいし絶対
人気出ると思うよ! やろうよ!」

「S o r r y . 他をあたつてくれないかしら?」

「まつたくあなたという人は…果南さん」

「よしきたつ! 鞠莉? OKっていうまで…こうだ!」

ダイヤの合図と共に果南が鞠莉にハグをする
「ちよつ! 果南! Stop! 分かつたから!」

分かつたから離してー！」

「決まりですわね、後は望さんに連絡するだけですわね」「ノゾム？ノゾムも歌つて踊るの？」

「いや、望にはマネージャーをやつてもらおうと思つて」
「Nice Ideaね！」

「では私から望さんに伝えておきますわ」

ここに浦の星女学院にスクールアイドルが結成された

「スクールアイドルを3人で始めるから

俺にはマネージャー的なものをやつて欲しいと」

「ええ、そうですわ。詳しい人は多いに限りますから」

その日の放課後、ダイヤと共に沼津駅近くの
カフェに来ていた

「いいんだけど、マネージャーって何をするんだ？」

「よくある学校の部活のマネージャーがやることと変わりありません
わ、ただ…」

「ただ…？」

「ええ、ここからは私個人のお願いなのですが」

ダイヤはなにやら渋ったような顔をする

「今さら渋つた顔すんなよ、俺とダイヤと…

果南と鞠莉の仲だろ？出来ることなら

なんでも手伝うよ」

「そうですね分かりました実は…」

「実は…？」

「作詞のお手伝いと作曲をお願いしたいのです」

「作詞はともかく作曲かー」

「ええ、果南さんに海辺でギターを披露したと

伺つてのことですので」

……はい？

「待つて、ダイヤ。それは誰から聞いたんだ？」

「果南さん本人からですが？なんとも嬉しそうな顔で
自慢してましたわよ。とてもお上手だと」

「はあー、まじか。わかつた引き受けよう」

「感謝いたしますわ、作詞のメインは果南さんが
作曲は望さんがメインで鞠莉さんが

お手伝いしますわ、そして衣装は私が担当いたします」

「私がつて1人で大丈夫なのか？」

「ええ、妹が手伝ってくれるそうなので」

妹：確かにルビイちゃん、だつたつけ
会つたことはまだないが

「まあそれならいいが」

作詞作曲衣装担当は決まり振り付けは
全員で考えることになった
後は肝心の…

「OK、それでいこうところで」

「なんでしょう？」

「グループ名は決まつてるのか？」

沈黙が続く、いやまさか

「決まつてない訳、ないよな？」

「そ、そうですわね。そ、そんなこと…」

「明日放課後全員集合。緊急会議だ。

アイドル始めるにあたつてグループ名
考えてないなんて言語道断だぞ…」



「はい、では今から緊急会議を始める議題は…分かつてるよな?」

議題は…分かつてゐるよな?」

「ちよつとダイヤ！なんでノゾムはこんなにAngryなの!?」

スクールアイドルを始めるのは贅沢

大前提としてグループ名が決まってないなんて言語道断

もせらん
曲や詩がて大事だし振り付けも
いかに可愛く魅せるか重要なもなる。ただな

そもそもお客様が最初に見るのはなんだ？名前だ。

それと同じで初めてのアイドルを見かけたときは必ず名前から見

るんだ
：

「ねえダイヤ」

いくら果南さんといえどもああなつた
星に、こころのいは、三十一つ

「というわけで、決まるまで帰れないと思えよ？」

「「「わざわざ——」」」

1 時間後

「お前ら…ちゃんと考へる気はあるのか?」

出た案はスリーマーメイドだつたり

浦女隊だつたり、果たしてこれで見てくれるのか

「まったく…少し休憩しようつか」といいながらテレビをつける

やつていたのは水族館の番組

「水族館…Aqua r i u m…アクア…」

「Aquaがどうしたの?ノゾム?」

「グループ名だよ、Aquaだと何か弱いから…」

といいながら紙にペンを走らせる

「Aqoursなんてどうだ?」

「Aqours、いい響きですわね」

「うん、すつごくいいと思う!」

「Wonderful Nameね!」

Aqours、きっと3人にはぴったりな名前だろう
「よし、じゃあAqoursで決定。本格的な練習は
来週から始めよう、それでいい?」
「「はーい!」」

その日の週末、沼津の喫茶店にて

「うーん、うーん

「そんなに頭抱えてまで考えることか?」
「だつて!作詞なんてやつたことないし!
全然思い付かないよ……というか

「ん?」

「望は作曲しなくていいの?」

「詞がないと曲も作れないだろ?ってこれ

昨日も言つたよな…。だから、手伝つて!つて
言つたの、果南だしな」

詞のイメージもない以上下手に曲なんて作ろうものなら詞と曲のイメージが合致しなくなる

「最初から言葉を考えるから駄目じゃないの？」

「え？ どういうこと？ 歌詞つてそう考えるんじゃないの？」

「それで思い付けば簡単だよ、そりや。

でも出来ないのなら、イメージから考えればいい」

「イメージ？」

「そう、イメージ。3人でどういう歌を歌いたいのか何を伝えたいのか、大雑把でいいから考えるんだよ

単語でもなんでもいい、出たイメージを全部書き出してみたら？」

下手に考えるよりは近道になるかもしね

「俺たちは始めたばかりでまだ未熟なんだからさ

未熟なりに頑張ろう」

「…未熟？ 未熟、そうか！」

なにか思い付いたらしい

こういう閃きは果南特有のものかな？

「なにか、思い付いた？」

「うん！ 明日、ダイヤと鞠莉にも話してみる！」

「OK、出来たらメールでもいいから送つて曲作り、始めるから」

「わかった！ ありがとう、望！」

「どういたしまして。じゃあ頑張ってね」

詞のイメージも決まつたところで店を出て帰路につく。明日からは体力作りの練習で早朝から集合である

目指せ東京！

「鞠莉の様子が変？」

「そう、鞠莉のこと呼んでも返事が遅れたり練習にも身が入ってなさそうっていうか」

果南曰く、授業中も部室でも上の空だという

「朝練で見てる限りはそうでもなさそうだつたけどな。なにか聞いたのか？」

「うん、聞いたんだけど答えてくれなくて
ダイヤにも頼んだんだけど駄目だつて…」

Aqoursとしての曲『未熟DREAMER』を発表して以来新進気鋭のスクールアイドルとしてPVの再生数も伸び、次の曲はどうしようかと考えてる最中での出来事である

「果南とダイヤが聞いてもダメだから

俺が聞いてみて、つてことね。他になにか変わつたことつてある？」

「んー、最近先生達と話すことが多かつたかな？」

お昼休みはいつも職員室に行つてるかも」

「なるほどね、わかつた聞いてみる」

「ありがとう望」



「よっこいしょっと」

「珍しいわね、ノゾムがここにくるなんて」

「そうか？先月来た気がするよ」

「果南の頻度が多かつただけだわ」

ホテルオハラの裏にあるほんの小さな岬

果南はよく鞠莉に会うために使つてて

真正面から堂々とは入れないため

海を泳いできてる

「で、What, s wrong ノゾム？まさか何の用もなしにマリーに会いにきてくれた、訳じやないでしょ？」
「察しがいいようで。じゃあ单刀直入に言うね」

答えて欲しいと諭すように、そして核心を突くよう

「鞠莉、果南たちになにか隠し事してるでしょ」

「What？そんな、マリーが果南たちにSecretだなんて」「俺にも言えないこと？」

鞠莉が暗い顔になる

「ノゾムになら話してもいいかな」

口を開いて話し始める

「私ね、留学に誘われてるの。ほら、私つて意外と成績優秀だし。だから言つてみないかつて。

でも、断つてるわ。今は留学よりも果南やダイヤもちろんノゾムと、School Idolをやってたほうが樂しいもの」

留学、最低1年下手すれば果南たちが卒業するまで帰つてこないだろう

「でも断つてるなんなら隠さなくともいいんじゃないか？留学誘われてたけど断つちゃった、てへぺろつて言えば済む話じやないか」

「ところがそうもいかないのよ。Teacherたち、しつこくてね」

悩んでいるのはそこだったのか

「そつか。俺に出来ること少ないとと思うけど何があつたらいつでも」

「ええ、そうするわ。とりあえずは…」

「果南とダイヤには話が終わるまで内緒、だろ？」

「o f c o u r s e、お願ひね」

「かしこまつたよ、じゃつおやすみ」

「ノゾムも、おやすみ」



「(鞠莉のことは時間が解決してくれるとして次の曲だよなー)」

自宅にて次の曲について迷走していた
すると、歌詞を打ち込むために起動していた
PCにメールが来ていた

「…………びぎやああああああああああああああああああああ!!!!!!」
「うるさいわよ！望！」

声に反応したのか母さんが勢いよくやつて來た

「……きょ……よ」

「なに？どうしたの？」

嬉しさのあまり舌が回つてなかつたらしい

「東京だよ！東京のスクールアイドルの

イベントにA q o u r sが呼ばれたんだよ！」

「A q o u r sつて果南ちゃんたちがやつてる？」

「そう！ぐうー！明日みんなに伝えないと！」

みんなの驚く顔が目に浮かぶ、楽しみだ

◆次の日の朝練◆

「どうしたの、望？練習前に話つて」「練習の時間を使うってことは

「ああ、So importantな話ってことなのね」
実は東京スクールアイドルワールドに招た

「何を言つてるんですの、果南さん！」

東京スクールノートのことは、「はい、ダイヤ静かに。俺が説明するよ」

卷之三

と仰て落せ着かせる

「東京スクールアイドルワールド、全国各地のスクールアイドルが東京に集結してライブをするんだで、観客に審査してもらつてランキングがつくんだ要するに模擬的なラブライブみたいなもんだよええ！でするので日本各地のスクールアイドルが目の前で見れるつてことですわ！」

みんなの答えは決まつてたんだろうけど念のため

「参加、するんだろう？」

「「もちろん（ですわ）！」

「よしつ！じゃあ東京スクールアイドルワールドに向けて曲作りと振り付け、やるぞ！」

この決意がやがて亀裂を生むことも知らずに…

「ところで開催はいつですか？」

「ん？ だいたい 1か月後かな」



「んー」

「どうした、果南？」

「いい言葉が思い付かない！」

いつものように果南と喫茶店で
歌詞の案を考えていた

「無理に考えすぎなくともいいよ、向こうからは
未熟DREAMERでお願いしたいとは来てるしね
まあ先のことを考えるのはいいけどね」

正直、未熟DREAMERでもいい気もするが

「鞠莉からはアップテンポな曲がいいって
言つてるんだよね。ダイヤはお一人に
お任せしますわ、だなんて考える身にも
なつてよーつて感じ」

「アップテンポな曲になると振り付けも
激しくなるから色々考慮しないとなー」

アッペテンポな曲になるほど
振り付けが激しくなる。みんなの体力を考慮して
前回はスローな曲調にしたが

「まあアッペテンポな曲の振り付けの候補はあるし、出来ないことはないが…」

「ないが…？」

「やるとしたら他の誰でもない、果南だよ」「げつ、まあ望の要望なら応えないとね！
で、どんな動きなの？」

と言われたので動画サイトを開き
その動きの動画を見せる

「うわあ難しそう、でも出来たらすごいね！」
「難しいから怪我もしやすい、

やるかやらないかは果南に任せると

「やる！」

「即答かよ！」

「だつて出来たら格好いいじゃんー」

こうなつた果南は止められない

「わかつた、でも絶対無理はしないこと

無理だと感じたらマネージャー権限で止めるからな

「はいはーい」

「じゃあ今日はこの辺で、もうすぐ連絡船の時間でしょ？」

「あー！ そうだつた！ ジャあまたね！」

「おうーまたな！」

崩壊まで後……？

東京スクールアイドルワールドの開催まで
1週間が切つたところ

「お昼だー！」

「まつたく果南さんつたら大声だして
はしたないですわよ」

「いいじやんいいじやん！ね？ 鞠莉？…あれ？」

「鞠莉さんなら終わると同時に教室から
出ていきましたわよ。」

「そつかー、探してくる！」

「あつ！ 果南さんお待ちなさい！…まつたく」

「まつたく鞠莉つたらどこ行つたんだろう…
あつ、鞠莉…と先生？ 何話してるんだろう？」

「留…学?」



「1 2 3 4 5 6 7 8…果南! 少し遅れてる!」「ご、ごめん!」

昨日から果南の様子がおかしい。
考え方? 上の空というか…

「果南、少し休もう。」

「え? だ、大丈夫だよ! ほら体力が取り柄だしね!」

「体力が取り柄の果南さんが遅れるなんて
そうそうないでしようが、きっとどこかで
疲れが出るのでしよう。望さんの言う通り
少し休んだほうがよろしいのでは?」

「う、ううん、大丈夫! だから!」

やはり様子がおかしい。無理してるような

「…今日の練習は終わり。果南、話があるから

少し付き合つて

「え、あ、うん…」

練習を終わらせ、果南の家の前に
ふたりで腰を下ろしていた

「で、何か悩み事か？」

「…やだなあ、望つたら私が悩み事に
縁があると思う？」

「あるから聞いてるんだろうが…」

考えたように、振り絞るように
言葉足らずで、不器用だけれども

「もし、もし私たち4人が離ればなれに
なっちゃつたらどうする？」

未熟なわたしたち

「4人が離ればなれになつちやつたらどうする?」

その言葉に戸惑つてしまつた

恐らく鞠莉の留学の話であろう

そうであるとしたらどこで聞いた?

誰から聞いた?気になることばかりだが

「急にどうした?」

知らない振りをして問いかける

気づかれてはダメだ、まだ鞠莉のことと
決まつたわけではない

「鞠莉が、留学に行つちやうかもしけないの」

不安が的中してしまつた

「鞠莉が言つてたの?」

「ううん、でも職員室で鞠莉と先生が
話してゐのをたまたま聞いちゃつて…」

なるほど、鞠莉が自分から喋るわけはないし

どこかでたまたま聞いてしまつたつてところだろう

一時的でも構わないから、果南を安心させないといけない

「その話は最後まで聞いたの？」

「え？ いや途中で教室に戻っちゃつたから
最後までは聞いてないけど…」

「てことはまだ鞠莉が留学に行くなんて
決まつた訳じやないだろ？ もしかしたら
行かないって行つてるかもしけないし

そもそも俺たちを置いて鞠莉が1人で留学なんて
行くと思うか？」

「…行かないと思いたい」

「まあ、まずは鞠莉を信じよう。信じられない仲じやないだろ？ 俺よ
りも長くいるんだからさ」

「うん、わかつた。ありがとう望」

「お安いご用よ、じゃあ俺は帰るね」

（その日の夜）

p r r r r :

「C i a o ! ノゾム ! どうしたの ? 急に電話だなんて」

「ん、ああ果南のことでね」

「気づいちやつた？」

「廊下で聞いたやつたらしいよ、昼に鞠莉を探してるときに」

俺はさつきあつた出来事をそのまま鞠莉に話した

「ところでこれは俺も気になるんだが…」

「どうしたの ? マリーになんでも言つてみーなさーい！」

気になつてることをそのまま。

変に隠すほうがおかしくなる。

「鞠莉は留学、行くのか？」

「行かないよ？」

「即答かよ！」

あまりにも予想外に素早く返事が返ってきたのでさすがに驚いた。

「今はSchool Idolやつてたほうが楽しいからね」

「そうか、ならいいんだけどさ」

「ノゾムは私に留学、行つて欲しい？」

急に真面目なトーンで聞かれるもんだから…

「んー、鞠莉が行きたいって思うなら応援する
行かないのなら全力でAqoursをサポートする
俺に出来るのはそれぐらいだよ」

「そう…ありがとう、ノゾム。

もう遅いから寝ましょうか、また明日練習でね」

「おう、おやすみ。また明日」



「1 2 3 4 5 6 7 8…鞠莉ちょっと遅れてる！」
「Sorry！」

「ダイヤ、今のところもつと腕を伸ばして！」

「はい！」

「果南、ステップ追い付いてないよ！」

「ごめん！」

「はい、10分休憩ね。この休憩が終わったら見せ場のアクロバットとフォーメーション確認ね
果南、いけそうか？」

「もつちろん！任せといて」

東京スクールアイドルワールドに向けての
フォーメーションの確認

メインは果南、ふたりは後ろだがふたりもふたりで
難易度の高い技をやる

「よし、休憩終わり！一通り通しでやつて
そのまま入ろう」

果南の悩みをちゃんと解決していれば
あいつは弱さを見せない子だから
ちゃんとそこに気づいていれば

「いくぞー！」

ちよつとしたことに気づいてあげれば

「……果南!? 前!!」

「えつ? うわつ!!」

「鞠莉! 危ない!!!」

ああ、なんて自分は未熟なんだろう
いや、まだ高校生なんだからそりや
未熟なんだろうけど

不安定な感情の中、大技なんてすれば
どうなるかなんて予測はついたはずだ

ドサツ!!

「果南! 鞠莉!」

マネージャー失格かな？

「つつつ…」

「鞠莉？ 鞠莉！ 私…」

「D o n' t w o r r y よ、果南これくらいなんとも…」

「ないわけないだろ、鞠莉に突っ込んでつた

果南を避けようと立ち上がつたらそのままぶつかって
…足首捻つただろ、結構強めに」

避けようと立ち上がつたのがまづかつたのだろう
勢いのまま果南を受け止めてしまつて
そのままバランスを崩した拍子に捻つたんだろう

「ダイヤ、応急手当用の箱から湿布と包帯

あとテープングね」

「びぎつ！ は、はいつ！」

「ノゾムも大袈裟ね！ これくらい平氣…つつつ!!」

「無理をするな、ありがとうダイヤ。」

いつ誰かが怪我をしてもいいように
練習しておいてよかつた、まさかこんな
大事になつたところで使うとは思わなかつたが
いや、怪我をさせた時点ではマネージャー失格か

「手慣れますわね、望さん」

「うん、こういうこともありますうとね。

応急処置だけだけど、必ず病院に行くこと、いいね鞠莉」

「もう…ノゾムの言うことなら仕方ないかな」

専門の知識は持つてないので出来るのは
応急処置までだ。それ以降は専門の人には
任せるべきだろう

「…練習したけど東京スクールアイドルワールドは

諦めよう、怪我したアイドルが人前に出るもんではない」

「ダメよ！ノゾム！これぐらい本番までには

治してみせるわ！」

「…駄目だ、マネージャーとして許可できない」

「そんな！ここまできて!?」

怪我したアイドルが、ましてやスクールアイドルが
人前に出ようものならアイドルとしてのみんなの
評判だけではなく学校そのもののイメージを
悪く見られてしまう可能性が大きいだろう

そうなつたら廃校を阻止するために活動してる

Aqoursは特に、廃校を促進させる流れになりかねない。

「いえ、やりましょう」「ダイヤ?」

黙りだつた空氣を壊したのは意外にもダイヤだつた

「せつかくここまで来たんですもの。鞠莉さんも治ると仰つてますし、鞠莉さんを信じましょう」「信じる言つたつてこの怪我は…」

「鞠莉さんは私が診ますわ、望さんは果南さんを」

鞠莉を診てて気づかなかつたが
果南がいない

「…任せていいか?」

「ええ、これでも将来は黒澤家の跡取り
これぐらいできて当然ですわ、それよりも
恐らく果南さんのほうが…」

恐らく鞠莉を怪我させたプレッシャーに
耐えられなくなつたんだろう

「わかつた、任せた!」
「了解しましたわ、そちらこそ
果南さんのこと任せましたわよ」
「おう!」

そういうつて走り出す

そんなに時間が経つてないから

そこまで遠くにいつてないはずだ

「果南！」

「望？」

「はあ…はあ…つたく、急にいなくなるから心配したぞ」

「だつて、私、鞠莉のこと…」

「鞠莉ならダイヤが見てくれてる、鞠莉も

大丈夫だつて言つてる、だから戻ろう？」

「うん」



「ところで果南」

「なに？」

「もしかして鞠莉の留学を応援るべきじやないか

つて思つてたりする？」

「つつ?!どうして分かつたの」

「何年一緒にいると思つてんだ…」

恐らく留学の話を聞いてしまったときからだろう
スクールアイドルに誘ったのは自分たち
鞠莉には鞠莉の将来があるから
それを邪魔してはいけないので、と
考えてしまつてゐるのだろう

「ちなみに鞠莉に行くのか行かないのか
聞いたら、行かないってよ」

「えっ!?」

「ほら、ふたりが待つてるぞ！」

「え、ちょっと！ 望？」



「未熟DREAMERでるぞ」
「「えっ!?」」

あれだけ参加する言つてたのに
この反応には驚いた

「参加、するんだろ？ 未熟DREAMERなら
ゆっくりだし、鞠莉の足の負担も少ないだろうし」
「そうですわね、参加するならそれが妥当ですわね」
「A l l r i g h t !! それならマリーもいけそうだわ！」

ダイヤも鞠莉も賛同してくれる
あとは果南だけだが：

「私は…うん、それでいいかな」

「…よし、じゃあ振りの確認な

鞠莉は見学、頭のなかででもいいから復習してて」

未熟DREAMERの振りを確認して

迎えた東京スクールアイドルワールド当日…：

決意と想いとこれから

結論から言うと歌えなかつた、いや歌わなかつた
鞠莉も怪我をしていたし留学のこともある
こんなところで鞠莉の将来を台無しにしたくない
そんな想いで、私は歌わなかつた
もちろん鞠莉やダイヤ、もちろん望にも

そんなこと言えないから

観客の波に呑まれて、緊張して歌えなかつた
と伝えてある。

傷つくのは私一人で十分

「果南さん!? 聞いてますの!?」

「えっ、ダイヤ? えーっとなんだつけ?」

「まつたく…これから活動をどうするかですわ
鞠莉さんの怪我が完治してからという話を
してたところですのに」

「Y e s ! D o c t o r に診せたら、無理しなければ
3日で治るっていう話デース！」

これからの活動…でも鞠莉には

「スクールアイドルは終わりにしよう」

「なにを仰つてますの、果南さん!」

「だつて！だつて…あの会場で歌えなかつたんだよ?
練習だつてたくさんしてきた、でも歌えなかつた
これから先続くとは思わない」

うまく、『まかせてるだろうか

「果南、それ本気で言つてゐる？」

「本気じやなければ、こんなこと言わない」

なんでこんなこと言つてしまつたんだろう
そんなつもりなかつたのに

「果南のわからず屋！」

「あつー！ ちょっと鞠莉さん!?」

私の言葉に嫌気が差したのか鞠莉が教室から出ていく
「果南さんあなた…」

「鞠莉の将来のためだから…」

「やはり、歌えなかつたのではなく

歌わなかつたのですね、鞠莉さんのために」

!?!?

誰にも言つてないはず、どこで知つたの?
望にも言つてないはずなのに

「どうやつて知つたのか？ つて顔してますわね
その顔をするつてことは図星ですわね
何年一緒にいると思つてるんです。

果南さんの態度や発言から、あなたの
考へてることは予測可能ですわ。

それで、望さんはこのことは？

「…言つてない」

「望さんに相談なさい、そして果南さんが
どうしたいか決めればいいでしょう」

望に…なんて言われるかな



「鞠莉の将来のために歌わなかつた、と」

「うん、鞠莉の将来のためにも

スクールアイドルはやめた方がいいって3人で話してた」

ダイヤから『果南さんがそちらに行くと思うので
話を聞いてあげてください』って
連絡が来たものの、相当拗らせてるな

「望はどうしたい？」

「どうしたい？って言われてもな…」

俺は初めから、AqoursをやるならAqoursを応援する
もし他にみんながやりたいことができたときは
そつちを応援するって決めてるからな」

俺の言葉に果南が黙りこむ

「私はどうしたらしいと思う？」

「知らん」

「即答!? ちょっとは考えてよ…」

知らないものは知らない

これは俺が入ることではなく…

「自分で考えて、3人で話し合つて決めて

それで出了答えなら俺は文句言わないよ」

「…わかった。考えてみる」



「どうしたの果南？改まつて話つて」

「うん、この間のことなんだけれど…」

「この間つて S ch o o l I d o l は 続けないつて話？」

「そう…」

沈黙が続く

言わなきや、言わなきやつてなるほど言葉がでない。

「…やつぱりスクールアイドルは辞めよう」

「果南…」

「果南さん、あなた…」

「それが果南の答えなのね、わかつた

S ch o o l I d o l A q u o u r s はこれで解散なのね」

「そう…だね。じゃあ私帰るね」

「ちよつと果南さん!?」

逃げるようにして帰る

ダイヤから呼び止められたような気がしたけど
気にしない、すぐにでもこの場から
離れたかったから

「果南のわからず屋…」

「ちよつと！鞠莉さんまで！」



「で、結局辞める話になつて、ダイヤを置いて
一人が帰つちゃうもんだから結論は出てないと」
「そうですわね…すみません、いきなり電話してしまつて」

3人で話し合つたそうでその後、

ダイヤから、連絡が来た

真つ先に果南か鞠莉から来ると思つてたが

「ダイヤはどうしたいんだ?」

「私…ですか」

「ダイヤがしたいことを応援するよ」

「と、言われましても…」

普段のお堅い顔がさらに堅くなつてゐるような気がする
そこまで難しいことではないとおもうが

「まあまたみんなで話しなよ」

「そう…ですわね。ありがとうございます。」

そう言つて電話を切る

電話で気づかなかつたが鞠莉から

メッセージが届いていた

それに返信するやいなや電話がかかってきた

「もしもし?すまん、ダイヤと電話してた」

「ダイヤと…そう、Sorry、いきなり電話しちゃって」「構わんよ、で…決まつたのか？」

「ええ、私…」



「果南とダイヤには言わなくていいのか？」

「そうね、言つたところでAqoursの解散は変わらないでしようし、School Idolをやらない浦の星に居たつて、意味がないから」

小原家兼ホテルオハラの屋上

ここからへりで東京まで行つて空港で搭乗手続きをするらしい、なんて贅沢な

「ところでノゾム？」

「どうした？」

「なんでマリーが今日出発するの知つてるのかしら？」

「はつはー、高嶺家の情報網をなめんな！」

「ノゾムの家系つてそんなだつたかしら…」

もちろん冗談であるがとある筋からはちゃんと入手してある、もちろん正攻法で

「まあいいわ、果南とダイヤにはノゾムから伝えておいて欲しいな」

「ほい、任された。着いたら手紙の一つぐらい送つてくれよ、後お土産！」

「お土産は送らないけど手紙は送るわ」

「まあ手紙だけで十分だよ」

鞠莉が黒服の人と話ししている

そろそろ出発の時間かな

「それじやあノゾム」

「おう、またな！」

「またな！つてノゾムらしいわね」

「今生の別れつて訳じやないんだし
またどつかで会えるだろ」

「そつか…」

しょげた顔しながらこっちに近づいてくる
そして顔を耳に近づけてきて…

「ノゾムのそんなところが——」

チュツ

頬にキスされた

いや、外国では当たり前の挨拶か
いやでも…：

「鞠莉、最後なんて言つた？」

「ふふつ、It, s a secret! また会つたときに
聞かせてあげるわ」

「そつか」

まるで夕焼けのように赤くてそして
そう言いながら鞠莉はヘリに乗り込んでいく
乗り込む時の鞠莉の顔は

まるで夕焼けのように赤くてそして

まるで女神がいるかのように
とても美しかったのはここだけの話

Step 0.5 残された想い

堅い想いはダイヤモンドのように

「ただいまー」

「お帰り、望。帰つてきて早々だけど
おつかい、頼まれてくれない?」

「んー、いいけどなにすればいいの?」

鞠莉が留学に行つて時が経ち

俺たちは2年生に進級して、しばらくが経つた

「ちよつとこれを黒澤さんのところまで
持つていつて欲しいの、頼める?」

「黒澤…うん、わかつた」

この沼津、内浦で黒澤という名字は
ひとつしかない。

そして、その黒澤さんちの長女

つまりダイヤとは、とある理由で喧嘩中である

「まだダイヤちゃんと仲直りしてないの?」

「いい加減、早く仲直りしなさい」

「…分かってるよ、とりあえず行つてくる」



「仲直り…つて言つてもなー。」

「向こうが話す気がないんじや、どうしようも…」

と考えてるうちに黒澤家にたどり着く

ピンポーン

「はーい！」

「あ、高嶺です」

「はいはい！ルビィ！ちょっと手が話せないから
お願ひしていいかしら！」

「あ、はーい」

しばらく待つてるとドアが開く
「ピギッ！ど、どうも…」

「ここにちはルビィちゃん、はいこれうちから」

「あ、ありがとうございます」

玄関先まで来てくれたのは

ダイヤの妹であるルビィちゃん

極度の人見知りで初めて会ったときは
目の前で急に大泣きされるものだから
ダイヤが鬼のような形相で駆け寄ってきて
こつぴどく叱られたのを覚えている
だが、慣れもあって今はこうして

普通？に話すことが出来ている…と思いたい

「あ、あの…」
「ん？どうした？」

ドアから覗きこむように話しかけられる
まだまだ普通に話せるようになるのは

時間がかかるようだ

「お母さんがよかつたら上がつて……だそうです」「あー、気持ちは嬉しいけど…」

そう、気持ちは嬉しいがダイヤのことがあるうつかり鉢合せしようものなら…と思うと

「お姉ちゃんは稽古中でしばらくは帰つてこないので、その…」「その…？」

「望さんと、スクールアイドルの話したくてお姉ちゃんがスクールアイドルのこと嫌いになつてから話せる人がほとんどいなくて」

〈ダイヤがスクールアイドルを嫌いになつた〉これがダイヤと俺が仲違いをしてる原因である

「そ、うか、じゃあ話そ、う！」
「は、はいっ！」



「スクールアイドルといえば、やっぱ
μ'sだよなー」

「そうですねー、やっぱルビイは花陽ちゃんですね
「俺はやっぱ、ことりちゃんだな」

2人で、Sが特集されてる雑誌を広げる
スクールアイドルの話になるとこうやつて
ちゃんと話が出来るようになる
同じ趣味を持つってすごくいいことだと思う

「やつぱ」とりちゃんと花陽ちゃんと『言えば…』
「こんなところでなにをしてますの」

聞き覚えのある声

しかし、明らかに怒気の籠つた声

「お、お姉ちゃん…」

「よう、ダイヤ。稽古は終わりか？」

「あなたには関係のないことですわ

なぜ、あなたが私の家で、スクールアイドルの
話ををしてらっしゃるのですか」

「ダイヤには関係ないだろ？おつかいついでだよ
どつかの頭の硬度が10みたいな誰かさんが
なんの理由も言わずに今まで好きだった
スクールアイドルを嫌いになるから

ルビイちゃんの話し相手になってるんだよ」

そうダイヤは特に理由も言わず突然

スクールアイドルを嫌いになつたのだ

理由は身内であるルビイちゃんも知らないらしい
しかし、スクールアイドルを嫌いになつた>
ぐらいで喧嘩なんて起きるわけもない

原因はその先で…

「その様子じゃ、またルビイちゃんに
スクールアイドル嫌いを押し付けてるんだろ
前にも言つたけど、止めろつて言つたよな
「望さんには関係のないことですわ！」

そう、その〈スクールアイドル嫌い〉を
他人に押し付けてるのである

前回も同じようにルビイちゃんと話してた際
同じような話をし、それが原因で
ダイヤと喧嘩し、今の状態に至るわけだが

「あ、あのっ！」

2人の喧騒をルビイちゃんが止める
人見知りだけど、名門生まれなだけあって
芯はしつかりしてる。

「けつ、喧嘩はよくないです

お姉ちゃんも望さんも、ルビイの好きな
スクールアイドルのことでの喧嘩しないでください！」

「もつともである

「ごめんね、ルビイちゃん。

今日は帰るわ、また今度話そう」

「もう来ないでいただきたいのですが」

「そりや無理でしょ、おつかいは断れないし

「あなたに会うと、私の決意が鈍るのですわ！」

「だつたらなおさら無理だな。俺には俺の意地がある」

そんな薄っぺらい決意なんて捨ててしまえばいい
だがこうなつたダイヤは名は体を表すかのように
ダイヤモンドのように堅い

「とりあえず、今日は帰るわ

また今度ね、ルビイちゃん」

「あっ、はい…」

こればつかりはどうしようもないんだ
ごめんね、ルビイちゃん



別に押し付けてるわけではありませんわ
別に私の前でスクールアイドルの話題を
あげなければ大して問題はありませんわ
ただ：

「他にどうすればいいのかわからないんですの」

涙が溢れそうになる
ですがこれは私が決めたこと
泣くのはいけませんわ

「お姉ちゃん？」
「ルビイ…」

いけませんわ、こんなみつともない姿
見せるわけには…

「出ていきなさい」

「ピギッ！」「ごめんなさい」

ごめんなさい、ルビイにまで
つらい想いをさせてしまつて
：そういう意味では望さんが言うように
押し付けてるというのはあながち
間違つては無いのかもしませんわね：

揺らぐ想いは波のように

案の定、鞠莉は留学に行つてしまつた
行くのを勧めといてこんないいかたはおかしいかもしだれないが
望は鞠莉が出発する日に会いに行つたらしい
私とダイヤは、ヘリ越しでライトを照らして

「鞠莉…」

今さら文句を言つても仕方ない
私が決めしたことなんだから
鞠莉の留学を応援するのは

「辛氣くさい顔してんな、似合わねーぞ」
「つてえ！ 望!? なんでここに!?」

実家のダイビングショツプの手伝いが
一段落ついて、少し休憩をしてたところに
噂をすればなんとやらで、望が来ていた

「ほい、これうちのじーちゃんから」
「あー、いつもありがとうね」

望の家からいつもお裾分けをもらつてゐる
広い土地を持つてて、色々栽培してゐるらしい
小原家や黒澤家の名門とまではいかないものの
高嶺家も割といいほうの家系である
鞠莉の留学の出発日をどこかで拾つたなど

まだまだ不思議な家系ではあるが

「ところで望、潜つてくなら準備するけど？」

「ん、ああ、久々に潜るか、頼む」

「はいよ」

望が潜るなら私も潜ろうかな
と思つて2人分の準備をすると

「果南ちゃん——ん!!」

聞き覚えのある声が聞こえてきた

「どうしたの、千歌？」

「あ、果南ちゃん、まだお手伝い

終わつてないの？あ、後これうちから！」

今日はよく物をもらう

「いつものみかんね、ありがとう
一段落ついたんだけど、友達が
潜りたいっていうからさ、それの準備中
「友達??」

あー、紹介してなかつたか
話す機会もなかつたし、仕方ないか

「ついでだから紹介しとくね

高嶺望、私のもう1人の幼なじみだよ
望、この子は高海千歌、私の幼なじみだよ

「よろしく、千歌ちゃん」

「よろしくお願ひします！高嶺さん！」



「ふう…久々に潜つたけどやつぱいいね」

10分ぐらいすると望が海から上がってくる
昔から潜つてるおかげか望のダイビングスキルは
誰かに教えることができるぐらいには上手い

「お疲れ、シャワーうちの使つていいから」

「お、助かるわ」

「タオルはいつものところねー」

「はいよー」

そう言つて中に入つていく

「ねえねえ果南ちゃん果南ちゃん」

最初の頃はひょろつとしてた感じなのに
年が経つにつれてがつちりしてきたなー

「ねえ、果南ちゃん？」

最初は二人で潜つてたのにいつのまにか
一人で潜りはじめて、なんだか寂しいなー

「つて私はお母さんか!!」

「果南ちゃん!?」

「わあああ！千歌！？いたの！？」

いたの! いやないよ! 3回は呼んだよ?」

「んーもういいよー！それより果南ちゃん？」

「どうしたの？」

「もしかして高嶺さんのこと好きなの？」

.....
はい？

え？ 私か？ 望を？ いや そりや好きか嫌
で言われればそりや好きだけど
それはあくまで幼馴染みとしてであつて
別にそんな恋愛感情とかはなくてって
なに考えてるんだ私は

「ちよつと果南ちゃん落ち着いて落ち着いて・」

もう！千歌！冗談でもそんなこと

「でも、果南ちゃんの今の顔、岡星なんじや

「俺がどうしたってー？」

シャワーから帰ってきた望が

それはもう鬼のような形相で寄つてくる

「え！ えつと！ その！ ほら！」

ガールズトーク！だよ！ねつ、千歌!?」

「は！はい！せつかくなんで！ほら！」

「ただのガールズトークで果南が慌てるかよ

んじや、俺は帰るわ、ありがとう」

「あつ、うん、またね」

もう少し話がしたい
という言葉を噛み締める

鞠莉が留学に行つてしまつてから
少し、冷たくなつた気がする

「果南ちやーん？」

「どうしたの、千歌」

「寂しそうだよ、もつとお話ししたい！つて顔してる」

「うつ…き、気のせいだよ！ほら、連絡船の時間！」

「あー!! もー!! 次は絶対聞かせてもらうからね！」

慌てたように千歌が帰つていく

ごめんね、千歌。これは私の問題だから



鞠莉が留学に行つてしまつて

スクールアイドルをやらなくなつてから
時間が有り余つてしまつた

もっぱら家業のダイビングショップの手伝いか

日課の早朝ランニングぐらいである
ランニングの時に寄る神社で踊つてみたりするが
なにか物足りない

「（あの頃が短いようで長くて
鞠莉がいて、ダイヤがいて
そして、望がいて…）」

あの頃に戻れるならどれだけ嬉しいだろう

「望はどう思つてるんだろう」

今からでも鞠莉を呼び戻そうか

でも、どうやって

仮に呼び戻したところで今まで通りに出来るのだろうか

「望に聞いても、分からぬいか」

鞠莉を留学に行かせるのが正解だつたのか

一緒にスクールアイドルを続けるのが正解だつたのか

今さらに揺らいだ思いは波のように

行つたり来たり

望んだ願いは高くて遠く

初めて会ったときは鮮明に覚えている
それが長い付き合いになつて
スクールアイドル始めて、マネージャーになつて
そんなこと誰が予想ついただろうか

「それが1人は喧嘩で距離置いて

もう1人はまさかの休学で連絡しづらい
そしてもう1人はもはや日本にいない…」

いや、果南とはたまに会うのだが
正直どう接したらいいのか分からない
冷たくなつた、なんて思われてないだろうか

「(今までマネージャーやつてた時間が
すっぽり空いてしまつたから、
なにしてたらいいのか分からないや)」

マネージャーを辞めてからのことなんて
なにも考えてなかつた
学校にいてもこうやつて
ぼけ一つとしてるだけだし

「高嶺くん」

そんなこんなで思い出に耽つてると
クラスメイトの女の子に話しかけられた

彼女もスクールアイドルが好きで
Aqoursを応援してくれていた

「どうした？」

「あ、うん、ほら来月ラブライブの決勝大会
高嶺くんがよかつたら一緒に行かないかなって」

そういえばそんな時期か

Aqoursが解散してからそんなこと
考えてなかつた

Aqoursとして活動してたら
きっと他のスクールアイドルの研究だ！
と、かこつけてみんなで行つてたのだろうが

「悪い、別の人誘つてくれ」

今は、そういう気分ではない

「そつか、急にごめんね」
「いや、こちらこそすまん」



いつもだつたらいつもの砂浜で3人が練習して
俺が茶々いれつつみんなのサポートをして：
こういう寒い時期でもみんなで体を動かしていれば
寒さなんてなんてことなかつた

「よつ…よつと」

ロングダートからのバク転
果南が一生懸命練習してた技

「決まってるところ見たかつたな」

いつも練習していた砂場で
そんな思い出に耽つていると…

「高嶺さん？高嶺さーん!!」

「千歌ちゃん？」

「はい！千歌です！」

確かに、果南の幼なじみ？らしいが

果南からはそんな話は聞いたことなかつた

「こんなところで何を…」

「今のすぐかつたですね！ぐるんつて！」

こんなに話を聞かない子だつたのか

「あ、そうだ！せつかくなんでうち寄つてきます？」
「…うち？」

「あ、すぐそこの十千万旅館！」

うち旅館やつてるんですよ！寒いですし

と言われながら腕を引っ張られる
こんなに強引な子だつたのか



かぽーん

どこか懐かしさを感じさせる風景
冬のおかげか日の入りが早くなり
星が見えはじめる

さて、母さんには何と連絡しようか

「はあ…冷えきつた身体がぽかぽか温まる、
いや、何で俺は呑気に温泉に浸かつてんんだ!!!」



「あ、お湯加減どうでした?」

「どつても良かつたよ、じゃあ帰るね
「待つてください!待つてください!」

「なんだなんだ…」

「ちょうどお話ししたかつたんです！ 果南ちゃんのこと！」「果南のこと？」

「はい！ ずっと話したかつたんですけど

最近、果南ちゃんの家で見かけなかつたので」

果南のこと…？

何が聞きたいのだ、スクールアイドルのこと？
果南が休学したこと？ いや、それについては
さすがに知つてゐるはずだ。

「果南の、何が聞きたいのかな？」

「あ、聞きたいのは果南ちゃんについてではなくて」「…どういうこと??」

「えーっと、なんというんですかね…」

高嶺さんが果南ちゃんのことどう思つてゐるか、です！」

…はい？

「と、モウシマスト？」

「あれ、高嶺さん大丈夫ですか？」

「と、申しますと？」

危ない危ない、あまりにも突然だつたから
すこし、飛びかけていた

「そのまんまでですよ！ 高嶺さんが果南ちゃんのこと

どう思つてるかです！」

「どう思つてるか…って言われてもな」

正直、どう思つてるかつて言われても
幼なじみで、内浦に来てからの
最初の友達、としか言いようがない

「幼なじみ、としか言いようがないよ」

適当に濁しておこう、濁すといつても
ほんとのことしか言つてないが

「そう、ですかー…」

「んー、なにかおかしいなー。と言わんばかりに
探偵の真似事か、顎に手を添えて考え事をしてる

「どうかしたか？そんなに考えて」

「あ、えーっとですね。高嶺さん、果南ちゃんのこと
好きじゃないのかなーって」

俺が果南のことを…?

「それはどういう…」

「もちろん恋愛的な意味でですよー！」

遮るように聞き終わる前に千歌ちゃんは答える

俺が、果南のことを恋愛的な意味で好きかつて？

いやいやいや、10年ぐらい一緒にいるが
そんなことは微塵も：いやまったくないって
訳ではないが、そりや可愛いとは思ったことはあるし
だからといって果南のことをそういう風に
思つてるなんて決めつけるのは…

「高嶺さん？高嶺さん？」

「とつ、とりあえず！俺と！果南は！
ただの！幼なじみ！だから！
じゃあ！帰る！温泉ありがとう！」

いてもたつてもいられなくなつて
飛び出すように帰る

「あちやー…」れは無自覚か

去り際に喋つた千歌ちゃんの言葉など
聴こえるはずもなく



「散々な目に遭つた…」

急いで、全速力で走つて帰つて来て
自室に籠り、机に突つ伏して
まさか、あんなこと聞かれるなんて

思つてもみなかつた。

「俺が果南のことを…」

そりやスクールアイドルのマネージャーやってたときも
果南とふたりでどこかに出掛けることはあつた
でもそんなこと意識したこともない

「スクールアイドルが続いていれば
なにかしら気付けてたのかな」

スクールアイドルが続いていれば
だなんて今さら言つたところで

ダイヤはもうスクールアイドルは嫌い

鞠莉は日本にいない

果南は家の手伝いで忙しい

「3人と繋いでたのがスクールアイドルだけ
だつたとしたら、なんだか寂しいな」

だつたら他のスクールアイドルの

マネージャーをやればいい、なければ作ればいい
と思われるかもしけないが

果南や鞠莉、ダイヤがいない

スクールアイドルのマネージャーなんて考えられない
あの3人だからこそマネージャーを

始めたようなものなのだ

「そういえば、千歌ちゃんの部屋に
μ'sのポスターがあつたな」

確かに、来年度から高校2年生だっけかもしかしたらスクールアイドルを目指すのかそのマネージャーをしていれば…、なんて幻想も浮かんでしまう

「もう一度あの3人で

μ , sのような輝きを目指せたら…」

3人だけでなく9人で、いや10人で
 μ , sにも勝るとも劣らない輝きを
掴むのはもうしばらくの話

Step. 1 輝きを目指して

あの日見た大きな輝き

あの日見つけた大きな輝き

普通な私にとつて、とても衝撃的で
私と同じくらいの、同じような女の子が
あんなにキラキラ輝いていて
私も同じように輝きたい！って
そう思つた。だから…



「スクールアイドル部でーーーす!!!

この春から出来た、スクールアイドル部でーーーす!!!」

スクールアイドル部を結成することにしました！

あ、遅くなりました、私の名前は高海千歌！

この春、浦の星女学院で高校2年生になりました！

東京で見つけたあの輝き、あの輝きを目指すため
スクールアイドル部を結成したのですが：

「千歌ちゃん、こつちも駄目だつた…」

「うう…なぜだ」

全く人が集まりません！

あ、この子は曜ちゃん！ 同級生で幼なじみ！
曜ちゃんほんとは水泳部なんだけど
勧誘だけ手伝つてもらつてます！
はつ！向こうに美女がいる！！

「すみません！」

茶色い髪のスタイルのいい子に
赤髪のツインテールの女の子！

「スクールアイドル！始めませんか!?」

「ずらつ？」
「…ずら？」

「あつ！いえ！」

「大丈夫！悪いようにはしないから！」

思わず言っちゃつた！みたいに

口をふさいじやう茶色い髪の子
可愛いのになあ

⋮赤髪の子がチラシをじーと見つめてる

「あつ、あの！ライブとか…するんですか？」

茶色い髪の子に隠れて話す

「ライブは…まだこれから！」

あつもしかして興味あつたりする？大歓迎だよ！」

と、がしつと手を握る

あれ？なんか顔青ざめてない？

「ピギヤアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

突然大声で叫ばれる、なんなのだ…

「ルビイちゃんは極度の人見知りずら」

そういうことか！

そんなことを思つてると木の上から突然人が!!

追撃でさらに鞄が頭に…

「ちよ…色々大丈夫？」

木の上から落つこちたし涙目だし

保健室連れていったほうがいいのかな？

と思つたら

「フツフツフ…フフフ」

え、突然笑いだした？

「ここはもしかして地上？」

「ひえっ！大丈夫じゃ…ない？」

「ということは、あなたたちは下劣で
下等な人間ということですか？」

「うわっ!?」

うん、だよね曜ちゃんそれがまともな反応だと思う

「それより足大丈夫?」

足が心配なのでちょっと触つてみる

「うつ、痛いわけないでしょ

この体は単なる器なのですから」

あー、足より頭の方が問題だ

「ヨハネにとつてこの姿はあくまで仮の姿
おつと!名前を言つてしましましたか」

えーっと、頭のお医者さんつて近くにあつたかな?:

「善子ちゃん?」

茶色い髪の子が中二病の女の子に話しかける
善子ちゃんつて言うんだ

「やつぱり善子ちゃんだ!花丸だよ!
幼稚園以来だね!」

茶色い髪の子は花丸ちゃんつていうのか

あつ、なんかじやんけんしたら

善子ちゃんが逃げていった

それにつられて花丸ちゃんとルビイちゃんも
行つちゃつた:

「後でスカウトに行こう！」

あの子達は人気出るぞー！

「このチラシを配つてたのはあなたたちですか？」

振り替えると黒い髪の美人さんが！

「この浦の星女学院にいつスクールアイドル部なるものが出来たんですの？」

「あなたも1年生？」

ここにいるつてことはそうだよね！

つて曜ちゃんどうしたの？

「違うよ千歌ちゃん、その人新入生じゃなくて
3年生、しかも…」

曜ちゃんに耳打ちされる。

「…生徒会長??」



あの後生徒会長にこつてり絞られました…

どうすればいいんでしょうか

「千歌ちゃん??」

「あつー！高嶺さん！もう学校終わつたんですか？」

学校帰りの高嶺さんに会つた

高嶺さんなんとかしてくれないかな…

「千歌ちゃんこの人は??」

「あ、曜ちゃんは会つたことなかつたか

高嶺望さん！果南ちゃんの幼馴染みだつて！

あ、高嶺さん、この子は渡辺曜ちゃん！

千歌の幼なじみです！」

「渡辺曜であります！」

「望です、よろしく曜ちゃん。

で、千歌ちゃん何してたんだ？」

あ、悩んでるところ見られたかな

「スクールアイドル、始めようと思つて

勧誘してたんですけど、人が集まらなくて…

どうしようかっていうのを曜ちゃんと相談してたんです

「…スクールアイドルか」

「そなんです！でも生徒会長が…」

「浦の星、生徒会長…ダイヤか」

生徒会長のこと知つてそうなら
何とかしてくれるかもしない

「生徒会長のこと知つてるなら

話してもらうことってできますか?」

「…すまん、無理だな」

「どうしてですか?」

「ごめんよ、曜ちゃん。確かにダイヤのことは知ってる

果南と一緒にいたからね。でも今はちょっと事情があつてね」

「そうですか…」

「仕方ないよ、曜ちゃん。こうなつたら

また生徒会長を説得しに行こう!」

自分達でやるしかないんだ!

「ありがとうございます!高嶺さん!」

「おう、頑張ってね」

よーし!頑張るぞー!



千歌ちゃんたちと別れて数分後

「やっぱそうなるよなー…」

予想通り、千歌ちゃんはスクールアイドルを始めるみたいだ
一緒にいた曜ちゃんつて子もやるのだろうか

「しつかし、ダイヤが生徒会長か。

これは骨が折れるぞ、千歌ちゃん」

なんたつて自称スクールアイドル嫌いの

あの硬度10だ、ちょっとやそつとじや
揺らがないだろう

p i p i p i

「メール？ 一体誰から…
はああああああああああ
!?!?!?!?!?」

海の音色は切なく、キラキラと

「日曜日？まあ暇だけど…」

「よかつたー！じやあ果南ちゃんの所に
集合でお願いします！それでは！」

プツツ…

「なんとも急な話だな…」

浦の星に転校生が来たらしいその子が海の音を聴きたい
とのことでダイビングに誘つたらしい
なら、一緒にどうかと千歌ちゃんから
お誘いを受けたのだが…

「とりあえず果南に連絡しておくか…」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「もう！高嶺さん遅いですよ！」

「ごめんつて、千歌ちゃん。あの子が転校生？」

「はい！おーい梨子ちゃん！」

なるほど、梨子ちゃんと言うのか

「梨子ちゃん紹介するね、こちら高嶺望さん！
望さん、この子が桜内梨子ちゃん、なんと！
音ノ木坂からの転校生です！」

「音ノ木坂、μ、sの」

「さつ、桜内梨子です、μ、s?については
よくわからなくて、すみません。」

「高嶺望です。気にしなくていいよ、よろしくね」
「じゃあ早速行こうか！つてあれ？」
高嶺さんは潜らないんですか？」

みんながウエットスーツに着替えてる中
俺は私服のままである。

「ははっ、俺は今回はいいよ。3人で潜つてきな
船には乗つてるからさ、なにかあつたら果南が
すぐに助けてくれるだろ」

「ちよつと望、そうやつてすぐ私に押し付ける」
「すまんすまん、じゃあ行こつか」



「どう？聞こえた？」

「残念だけど…」

「イメージかー、難しいもんね」

「簡単じやないわ、景色は真っ暗だし」

「真っ暗？」

「真っ暗…そつか分かつた！もう一回行こう！」

そう言つて3人は再び潜りだす
数分、沈黙が続いたがそれを破つたのは
果南だつた

「マネージャーの話してないんだ」

遠巻きに千歌ちゃんたちのマネージャーを
やらないの？と聞いているんだろう

「話してないよ、話したところで…だろ」

千歌ちゃんたちのマネージャーはやるつもりはない

「果南だつて、かつてスクールアイドルやつてたつて
言つてないんだろ？それと一緒だよ」「
「それは…そうだけど。」

曇り空から太陽の光が射してきた
それと同時に3人が海面にあがつてきた
海面に反射した光もあってか3人の笑顔は
とても輝いていた。それはまるで…

「あの時みたいだな」

「どうしたの望？」

「いや、なんでもない」



あれから当初作曲だけを手伝う予定だつた梨子ちゃんは正式に千歌ちゃんとスクールアイドルを始めることになつたらしい。

と、ここまでではいいのだが…

「急に呼び出して何の用だ…鞠莉？」

「あら、ノゾムつたら2年ぶりの再会なのにS O C O O I ネ」

そう、何故か鞠莉に呼び出されたのである

「そりや2年会つてなかつた友人に不意に会つたとかならそりやテンションも上がるだろうけど帰つてくるつて報告があつた上にこんな夜に呼び出されても困るだけなんだが…」

時刻は20時を回つたところである

「それはSorry、でもこの時間じやないと私も理事長の仕事で忙しいから」

さらに驚くことに鞠莉は理事長になつたのであるしかも、浦女の。それを知つたダイヤの顔を想像するのは容易い、だがそれより…

「で、用件は？」

「んつもうつ！つれないわね！」

分かつたわ、单刀直入に言うわ」

真剣な眼差しで伝える

「浦女のSchool Idolのマネジャーをやつて欲しいの」

「断る」

「What!? ていうか、即答?」

鞠莉のことだから浦女でスクールアイドルが
結成されたことを嗅ぎ付けて戻ってきたところもあるのだろう
まだ始めたばかりで、ライブもしていない
言つてしまえば素人の集まり、しかし

廃校を阻止するため外せない、【賭け】のようなものだ
鞠莉も2年前はスクールアイドル。μ,sが音ノ木坂で起こした
偉業は知っている
だからこそ、慎重にいきたいところなのだろう

「俺はスクールアイドルのマネージャーはやらない
浦女が廃校になろうがなかろうが、俺には関係のない話だ
関係のないものを手伝う道理はない」

「ノゾム…!!あなた…」

「用はそれだけか?なければ帰る」
「ちよつ…Wait!!」

鞠莉に背を向け歩き出す

「」

聞こえてるかどうか分からぬような声で呟く

「ちよつと！ノゾム！」

誰もいない展望台で声が響く

「あれだけ冷たくしておいて、最後に何を呟いたか
聞き取れなかつたけど！どうしてそんなに悲しそうな
顔をしていたの？ノゾム？」



目覚めは最悪だつた

昨日のこともあるがなによりも…

「浦の星女子学院スクールアイドルAqoursです！」

「ちよつと待つて千歌ちゃん！まだ公認になつた訳じやないから」

「あ、そうだ！浦の星女子学院非公式スクールアイドルAqoursで
す！」

Aqours：

「なんで、その名前を」

「あつ！たつかみねさーん！」

「げつ…」

「ああつ！げつ…てなんですか！」

それはそうだ。今日この日、絶対に会いたくなかった人物に会つてしまつたのだから

「よりによつてなんで今日なんだよ…」

「へつ？なんか言いました？」

高海千歌、現浦の星女学院スクールアイドル
Aqoursの発起人。数刻前まで町内放送を使って
ライブの宣伝をしていた張本人である。

「あつ！町内放送聞きました!?」

今週の日曜日、浦女でライブやるんで来て下さい！」

ここで会つたのが運の尽き、というのか
ならば外に出なければよかつたのだが
色々と用があつて出なきやいけなかつた
会つてしまえばこうなることは予想がついてたので
会わないように気を付けていたのだが

「その顔は来なきやみかんの刑だぞーつて顔だな」

「はい！体育館でやるんですけど

満員にしないと公認にならないので、一人でも

多くの人に来て欲しいんです！」

町内放送を使つたんだ人が来ないことはないと思うが
というか気になつてたがみかんの刑つてなんだ

「行けたら行くよ」

「行けたら、じやなくて絶対！ですからね！」

そう言つて千歌ちゃんは帰つていく

「行くしか、ないよなあ…」

昨日の鞠莉からの話もあつてか
少し憂鬱である

「変装、していくか…」

初めの一歩は大好きな気持ちで

「早く着いた…」

千歌ちゃんたちA q o u r sがライブを行う当日
あいにくの雨にもかかわらず早く着いてしまった

「(変装してるから大丈夫だとしても、男が女子高にいるつて
気が引けるよな。ライブのためのはいえ)」

まだ時間はあるしどうしようかと思っていた矢先

「あら? あなた」
「ん? …!!」

まさかの鞠莉と鉢合わせしてしまった

「あつ、えつと、ライブ、観に来たんですけど
早く、着きすぎちゃって。」

しどろもどろか! とこころの中で唱える
バレるわけにはいかない。特に鞠莉には

「シャイニー! チカっちたちのライブを観に来ててくれたのね
v e r y t h a n k y o u デース!!」

バレてない、大丈夫そうだ

「ところであなたは?」

「oh, 私は小原鞠莉、この学校の生徒兼理事長よ

せつかくだからこの学校を案内してあげる
ついてきて」

「えつ、ちよつ……！」

言われるままに腕を引かれる

3階から始まり、2階、1階と案内され
なぜか理事長室に連れていかれた

「いい、学校でしょ？」

「そう……ですね。」

バレないよう、と考えていると
返事がありきたりになつてしまふ

「でもね、廃校になるの？」

「え？」

「ううん、That's wrong. 廃校にはさせない」

「ど、言うと？」

「チカっちたち、ライブするでしょ？
スクールアイドルってしつてる？」

「まあ知識程度には」

「チカっちたちは、鍵なの。 μ , s のように

School Idolで廃校を阻止する。でもね、足りないの」

「足りない？」

「そう、3人じゃきっと足りない μ , s のように9人
いや、もう1人、10人でなら、きっと」

ああ、本気なんだ、本気で内浦が好きで

本気で学校が大好きで、本気でスクールアイドルが好きで
だから、帰ってきたんだ、救おうと

そういう、目をしている。

その内の1人がきつと自分なのだろうと自覚はしている
でも…

「出来ると、いいですね」

その想いにはきっと答えられない

「ありがとうございます、Sorry! こんな話に付き合わせてしまって
もうすぐ始まると思うから体育館へLet's go!! よ!
マリーはまだここで仕事が残ってるから後でいくわね」
「え、こちらこそ案内ありがとうございました」

そう残して会場である体育館へ向かう

「マリーの気持ち少しは届いたかな、ねえノゾム?」

せつなげに呟かれた言葉は聞こえるはずもなく
雨の音にかき消されていった

◇◆◇◆◇◆

「(まだ時間はあるけど雨、強くなってきたな)」

まだ時間はあるが雨が強くなり、雷も鳴り始めてる

「(停電とか起らなきやいいけど…予備電源とか
あるのか、この学校?)」

ちよつとずつだが人が集まり始めている
ほとんどが同じ制服、浦の星の生徒だが
中には自分のように変装してる人も…

「（いや、あれはどう見ても変装どころか不審者だろ…）」

サングラスにマスクはあきらかに不審者の二大オプションだろう
なんの話をしているのか分からないが
と、そんなことを思つてると開始のブザーが鳴り
ステージの幕が上がる、まだ少し時間はあつたはずだが…

「（俺が勘違いしただけなのか？いや、それより）」

幕が上がったステージの真ん中には
千歌ちゃんをセンターとし梨子ちゃん、曜ちゃんが並んでいたが
「なんでそんな悲しそうな顔をしてるんだ…」

スクールアイドルだけならず、世の中のアイドルは
人を笑顔にするのが仕事、故にステージに立つ以上
笑顔でいることが鉄則

少しでも悲しい表情を見せようものなら
それは観客に伝わつてしまい、ステージは成り立たない
それにこの人数では…

「駄目だな、これは」

そう思い帰ろうとしたとき

「――――――」

さつきまでの顔が嘘だと思うくらい
キラリとした笑顔が生まれていた

「(歌うのか…?)」

体育館にメロディーが、3人の歌声が響く

「(きっと素人目から見たらすごい、となるんだろうが
所々振り付けがずれてる、つらそうな顔が見える。でも….)」

振り付けがずれていようが、所々つらそうに見えようが
根本は変わつてないよう思える

「楽し、そりだな…」

そう、楽しそうに歌つて、踊つている

精一杯、輝こうとしている

そう思いながら、曲もラストに差し掛かろうとしてたとき

ガタンッ

「(なつ…こ)に来て停電!?)」

周りはざわめき始めている、想定外のトラブルだつたんだろう
ステージを見ると、千歌ちゃんがまた悲しそうな顔をしていた

それでも声を振り絞つて、歌おうと、輝こうとしていた

「くそっ…!!!」

浦の星が廃校になろうが関係ない
内浦でスクールアイドルが始まろうが関係ない
さらに悪いことを言うと千歌ちゃんたちが
許せなかつた。仕方ないと言えば仕方ないのだが
なにも知らないでAqoursという名前を使つていることに
なにも知らないで内浦でスクールアイドルを始めていることに
いつからだろう、純粹に好きなものを楽しめなくなつたのは
スクールアイドルが好きだつた2年前はあの頃の気持ちは
果南、鞠莉、ダイヤのAqoursのマネージャーを
やつてた頃の気持ちは

そんなことを考えるより前に

「（ダイヤか鞠莉：どこだ？）
足はすでに動いていた。



「1人で来たのが間違いでしたわ、やはり
誰か一緒に連れて…いや、私は生徒会長1人でだつて…」

普通の学校なら予備電源のバッテリーはすぐ使えるような場所においてあるのだが浦の星に関してはすこし離れたところに置いてあるそして、なにより

「重い、ですわ…」

重いのである

「望さん…」

やつてくるはずのない人の名を呟く。
きつと届かない、もう何ヵ月連絡を取つてないだろう
口を利いてないだろう。

距離が遠くなるほどの時間は、経つたはず

「ぶつぶーですわね、こんなところで弱音など
スクールアイドルはもう私には関係有りませんが
浦の星の威儀をかけて、どんな形でも
成功だけはさせなければ」

力を振り絞りバッテリーを持ち上げようとしたとき

「ダイヤ!!!
「えつ…?」

あり得ない、いるはずない、来るはずない
これはきっと夢なのかな

「はあつ…はあつ…俺が持つ。場所、教えろ」

「どうして望さんがここに!!」

「話は後!! 成功、させるんだろう?」

「あなたという人は本当に…」

夢でなかつた。

正義のヒーローみたいに困ったことがあると
いつも助けてくれた。なんでもお見通しだと
言わんばかりの目で助けてくれた

「…っ!!」つちですわ! 急ぎますので

ちゃんと付いてこないと、ぶつぶーですわ!」

「おう! 任せとけ!」

考えるのは後、まずはこのライブを成功させなれば…

「まつたくあなたという人は…」

予備電源で電気がつくと瞬く間に

「じゃあ! 続き見てくる!」と言い出し走り去つていつた

「いつになつても変わりませんわね」

いつになつても好きなものには一直線だつた
昔も今もそこは変わつていなかつた

「体育館が騒がしいですわね、まさかあの後…?」

そう思い体育館へ向かうと、そこにはたくさんの人で溢れていた



「これは…」

「急いで最前列で見ようと思つたら席取られてたよ。
内浦の、いや、それだけじゃなくて沼津のほうからも」「そうですか」

曲が終わり会場は拍手で包まれた

「さて、あなたのそのバレバレな変装に関しては
後で聞かせていただくとして…」

「えつ…」

「えつ…じゃありませんわー！果南さんでも分かりますわよ！」

えー…マスクにサングラスよりかは怪しまれないし
いけるかと思つたのに

「私はあの子達に言いたいことがありますので
…一緒に来ますか？」

「いや、俺は帰る。俺からはあの子達に言えることはないよ」

そう今のあの子達には言えることなんてない
そんな資格もない

「ですか、お気をつけて」

「おう、ダイヤもな」

互いに別れ体育館の外へ、雨は降り続いていたがライブが始まる前よりかは弱くなっていた

「来てたんだ、望」

「果南…あつ」

「あつ…て、それで変装してるつもりだつたんだ」

ダイヤの言うとおりであった

鞠莉にはバレてないことを祈るばかりである

「で、どうするの。マネージャーの話、千歌たちにするの？」

「…しないよ」

「…そつか」

あのライブを見て、許さない。という気持ちはどこかに消えた。きつとあのときの3人の

Aqoursを、果南とダイヤと鞠莉のAqoursと

今の千歌ちゃん、梨子ちゃん、曜ちゃんのAqoursの

面影が被つたのだろう

最初は、スクールアイドルが好きという気持ちで始めた最初の1歩なんて、そんなものだ。

「応援はする、でもマネージャーはしない」

今までは純粋に好きでいることが出来ない
少なくとも今までは…

素直な気持ちで奏でるメロディー

「で、あのライブのとき変装してた理由ですが」「鞠莉に会いたくなかっただけだよ」

ライブ以降少しづつダイヤとまた話すようになつたルビイちゃんの前ではまだスクールアイドルが嫌いということになつてゐるが

「どうしてまた会いたくない?」

「…マネージャーをやつてくれつてさ」

「鞠莉さんつたらまた唐突に…」

「呼び出されたのも夜だつたしな…」

あの夜、鞠莉と話したこと、ライブのとき
変装してたが鞠莉と会つて話したこと

それだけじゃなくて今まで話せなかつたこと

全部、話した。今までの溝を埋めるように

「あの雑な変装は鞠莉さんにはバレてるとして
千歌さんたちとは果南さん繋がりですか」

「そう、ダイビングショットに行つたときにたまたま。
つて、鞠莉にもバレてるのか…」

「よくあの変装でバレないとthoughtいたわね」

変装の技術磨くか

と、つまらないことを考えていたら

ダイヤの口から思いがけないことが出てきた

「しないのですか? マネージャー?」

「…しないよ」

今さらである

「そうですか…（あなたの場合、しないというよりは出来ない、に近いのでしょうか…）」

「じゃあこつちも質問な」

「はい？」

「はい？じゃない、ダイヤばっかり質問じや不公平だろ」

「ここ30分ぐらいダイヤからの質問攻めだったのであるさすがにこれでは不公平である

「あまり答えにくい質問はぶつぶーですわよ」

「大丈夫大丈夫。俺が聞きたいのは1つだけだからさ」

あのライブ以降、感じてたことを告げる

「…ルビイちゃん、スクールアイドル部に入りたい
って言つたらどうするんだ？」

「私のことではないのですね」

そう、兼ねてから気になつてたルビイちゃん
俺が黒澤家に顔を出さなくなつてから

スクールアイドルについて話す相手がいなくなつたのでは
そして、きっとあのライブを見に来てたであろう
ライブに感じたことを考えれば、きっと

スクールアイドル部に入りたいと思うのは間違いなくあるだろう

「…わかりませんわ。今でも私の前ではスクールアイドルの話はしませんしもし、言われたとしても私には止める権限なんてありませんわ」

「そつか、まあ断固拒否とか言わないだけましだつたかな」

ダイヤもきっとあのライブを見て思うことはあつたのだろう

「まあ母さんの用事でまた寄ることがあるかも知れないし、その時は多目にみてくれ」

「どうろで今まで来なかつたのは？」

「全部断つてた」

「はあ、あなたという人は…」

「仕方ないだろ…つと、もうこんな時間か」

時間はすでに夕方の18時を回っていた
お互い学校帰りであつたためそこまで
話す時間はなかつたが

「…ルビイちゃんのこと、ちゃんと向き合えよ」

「分かつてますわ。つて代金は!?」

「いいよ、俺持ちで。

こんなんで埋められたつもりはないけどな」

「まつたくあなたはいつもいつも…」

「昔から変わらない、つてか？」

「…そうですわね」

たかだか1年2年で、人はそう変わらない
確かに変わるところもあるけれど
根本は変わらない

「じゃつ、気を付けて帰れよ」

「そこは送つてくよ、ではないのですね」

「そんな乙女じやないだろ、ダイヤ」

「んまーっ！失礼ですわよ！相変わらず

口が悪いですこと！」

「そりやお互い様だつつーの！」

なんて言い合いをしてたら

いつの間にかダイヤを送り届けてたのは

ここだけの話



「久々に弾く、かな」

久々に取り出したのは昔いつも使っていた
アコースティックギター。2年前に始めて
しばらく触つてなかつたが久々に弾こうと思つたのは
やはりあのライブが大きいのだろう

「弦とか大丈夫かな」

と、調整していると

「高嶺さーん！」

「千歌ちゃん？」

そういえばこの辺は十千万旅館の近くか

近くといつても少し離れたところを選んだつもりだが

「制服じゃないことは練習終わり？」

「はい！ライブもうまくいったのでさうに
歌とダンスに磨きをかけようと！」

あ！見に来てくれましたよね??」

「ああ、見たよ。曲、よかつたよ」

あえて、歌とダンスには触れない

「ほんとですか!?歌詞、千歌が作詞したんですよ！
作曲は梨子ちゃんで衣装は曜ちゃん！
振り付けはみんなで考えたんです！」

スクールアイドルの話になるところも
楽しそうな顔をするのか
まるでダイヤのようである

「そうか、それはすごいな」

「あ、でもやっぱ3人で認められたとはいえ
メンバーを増やしたいんですね…」

目指すは、Sのように9人！」

「ははっ…頑張れ。ところで誘うあてはあるのか？」

「はい！ルビイちゃんと花丸ちゃんなんんですけど
あ、ルビイちゃんは生徒会長の妹で
花丸ちゃんはルビイちゃんのお友だちなんです」

ルビイちゃんを誘う

果たしてダイヤはどう思うであろうか

「そう。花丸ちゃんって子は知らないけど
ルビイちゃんは顔馴染みだからさ、もし
やりたい！ってなつたらよろしくな」

「はい！あ、そういうえば気になつてたんですけど
「ん？」

「高嶺さん、ギター引けるんですね！」

そこに今反応するのか

果南にしか聴かせたことないから

出来ればそのまま帰つて欲しかつたところであるが

「わー、すゞいすゞい！」

まるで今ここで何か弾いてくださいと
言わんばかりに目がキラキラしている

「なにか弾こうか？」

ここでなにもしないのはかえつて
ねだられるだけなので諦めることにする

「ほんとですか！じゃあ……これなんですけど」

と言つて携帯の画面を見せてきた

その画面には、sの『ユメノトビラ』であつた

「ユメノトビラ、ね。アコギじや雰囲気
ちょっと変わるけどそこはご愛敬で」

そう言い調弦を終えたギターを構え
歌詞を口づさま

μ , sがA-Riseと合同ライブでUTXの屋上で歌った曲
夢へと駆け上がる9人の女神の曲
聴くと前向きになれる曲の1つである

「ふう…どうだつたかな?…千歌ちゃん?」

弾き終え、千歌ちゃんのほうを見ると
ポカーンと口を開けて見つめられていた

「千歌ちゃん?おーい」

「はっ!す、すごかつたです!

『というより μ , s知ってるんですね!』

「ああ、まあちょっとね、初めて弾くつて訳でもなかつたし」

「そうですか:つて!もうこんな時間!

志満ねえに怒られる!高嶺さん!ありがとうございます!」

「おー、またなー」

そう言い慌てて帰っていく

μ , sを知っていることにつっこまれそそうだつたが
時間が味方してくれた

ここで話せば鞠莉のときと同じように

マネージャーやつてください!つて誘われる可能性だつてあつた

「それだけは避けないとな」

向き合うのは自分自身の気持ち

「そつか、スクールアイドル部入ったんだね」

「はい！お姉ちゃんには節度を持つてやるのであれば
なにも言いませんわって」

久しぶりに黒澤家でルビイちゃんと
スクールアイドルについて話していた

なんでも千歌ちゃんに誘われ

友人の花丸ちゃんと一緒に加入したらしい

「そつか、ライブやるなら見に行くから」

「ほんとですか！楽しみにしててくださいね！」

「分かった、楽しみにしてる」

根っからスクールアイドル好きはダイヤと変わらない
ダイヤと違つて、こんなに笑顔が眩しいが

「さて、そろそろダイヤが来そだから帰るね」

「あ、そうですね。そういうば高嶺さん」

「ん？」

「あ、いえ、なんでも、ないです…」

なにかを訴えるような目をしていたが
何を言おうとしていたのだろうか

「ルビイはどうでしたか？」

「どうでしたかって言われてもいつも通りだつたよ」

帰り際の玄関でダイヤに声をかけられる
稽古終わりなのだろうか着物を着ていて

黒髪も相まって、まさしく大和撫子という感じだ

「どうかこんなところで油売つてていいのか？」

「そうですわね。ルビイに見られもしたら

なんと思われるか…」

「ほんとダイヤは相変わらず硬度10だな」

「誰が硬度10ですか！鞠莉さんみたいなこと

言わないでくれますか！」

「わりいわりい、じゃあ帰るわ」

「まつたく…何はどうあれ、ルビイのことは
お世話かけますわ。」

相変わらず硬度10…なんて言つたら怒られるか
相変わらず律儀なようで

「いいよ、気にしなくて。俺も嫌じやないから。」

「本当にすみませんわ。では、お気を付けて」

「おう、またな」



「さて、用事があるから駅のほうまで来たものの…」

すぐに済む用事であつたため時間を持て余していた

「どうすつかなー…と、 ん??」

ふと周りを見ると、マスクにサングラスに特徴的なお団子知らない人から見たら明らかに不審者なのだが

「確かライブに来てた…よな?」

あの日、浦の星で行われたライブに来てた気がする
あの時は確かに人もまだ少なかつたためよく覚えている
…怪しそぎて、だが

「ねえ??」

「はい?!」

声をかけたらすぐ驚かれた。

いや、脅かすつもりはなかつたのだが

「いや、すまん。そんなつもりじゃ…」

「貴方、私の姿が見えるのね?」

「…はい?」

「クツクツク…この堕天使ヨハネの姿が見える
ということは貴方も私のリトルデーモン!」

「…………はあ?」

いきなり何を言い出すんだ

ライブの感想を聞いたかつただけなのに

俺は話しかける相手を間違えたのか…

「すみません、話しかける相手を間違えました」
「ちょっと待ちなさいよ!!」

さつさと帰つた方が身のためだと思い
バス停のほうへ向かつたのだが引き留められた

「アノ、ナンデシヨウ?」

「どうして片言なのよ! 貴方、浦の星で
へんてこな変装していた人でしょ」

へんてこつて…

「確かに浦の星にはいたけど、へんてこは
思いつきりブーメラン刺さつてるぞ」
「ブーメランつて何よ! この堕天使ヨハネの
華麗なる変装に文句があるわけ!」

駄目だ、埒があかない

「ライブの感想、聞きたいんだ。」

「ライブつてあの時の?」

「それ以外になにがあるんだ?」

「フツ、まあいいわ。この堕天使ヨハネが…」

「善子ちゃん?」

「げつ、その声は! ズラ丸!」

なるほどなるほど善子ちゃんというのか
つと、あれ?

「こんちにはルビイちゃん。お出かけ?」

「あ、高嶺さん、こんにちは。

花丸ちゃんの用事のついでに
本屋さんに寄ろうとしてたんです」

なるほど、この子が話に聞いてた花丸ちゃんか

「高嶺望です、よろしくね花丸ちゃん」

「国木田花丸ずら、ルビイちゃんがいつも
お世話になつてるずら!」

「…ずら?」

「ずら? ってなんだ、方言…なのか?」

「はつーおら、またずらつて言つてしまつたずらあ…
「…おら?」

というよりもたずらつて言つた?

「はつーえつと…」

「あー、気にしなくていいよ。話しやすいのなら
そのままでいいし。というより立ち話もなんだし
どつか座ろう?」

そう言い、駅近くのコンビニのイートインに腰を掛ける
ルビイちゃんからは話を聞いていたので

花丸ちゃん、善子ちゃんから各々、あの時
ライブについて感想をして自分の感想も伝えあった

「あ、そういうえば善子ちゃん忘れてたずら
これ、今週の授業のノートずら」

「だからヨハネよ！ていうかここで渡さないでよ！」

…今週？

「善子ちゃん、学校行つてないのか？」

「あつ、えつと…行つてないというか、そのー…」

「善子ちゃん、最初の自己紹介で盛大にスベつちゃってそれから学校に来なくて…」

花丸ちゃんと善子ちゃん、幼馴染みだからこうして授業のノートとか配布物とか届けに行つてるんです」

いつたい何をすれば自己紹介でスベるんだと思つたら そういえばその堕天使ヨハネがなんたらかんたらか…

「気にしなくていいと思うけどな」

「え？」

「別にいいじゃないか、設定だらうが事実だらうが それは善子ちゃんの個性だろ？周りがとやかく 言うものでもないし、言う権利なんてないよ。

だから、学校にはちゃんと行こう。なにかあつたら 花丸ちゃんとルビイちゃんが助けてくれるさ。」

「…け、検討しておくわ。」



ルビイちゃんによるとその後ちゃんと学校には 行つたらしい。堕天使設定が出そうなときは 花丸ちゃんに止めてもらうことにしたそ�だ

「で、また呼び出しておいて何の用だ。鞠莉」

「つれないわね、ノゾムつたら。用がなくちや呼んじやいけないの？」

「口クなことじや呼び出さないだろ」

「分かってるくせに」

間違いなくマネージャーの件である

「いつまで逃げるつもりなの？」

「…っ!!」

「図星ね。ねえノゾム」

「鞠莉には…関係ないだろ」

「ちよつとノゾム！」

一刻も早くこの場から立ち去りたいがためにエレベーターに駆け込む

誰もいない展望台で声だけがただ響いていた

「（あー、なにやつてんだもう…。
逃げているなんて思われても仕方ないか…）」

鞠莉の言葉が脳内をぐるぐる回っている

「止めよう、考えてても仕方ない」

エレベーターを降り、帰ろうとした時

「あーー！高嶺さん！その子止めてください！！！」
「は、え？」

急いで自分の横を走り去ろうとする子を
つい反射で腕をつかんでしまう

「ちよつと！離しなさいよ！…つて」
「あれ、善子ちゃん？」
「だから…ヨハネ…よ」
「高嶺さん、ありがとうございます！」
「つて、千歌ちゃん？え、どういう状況？」
「勧誘です！」

そんな風には見えないが…

千歌ちゃんが言うならそうなんだろう

「俺から言えることはそんなにないけど」
「え？」
「俺みたいにはなるなよ、後悔するから」
「え、ちよつとどういうことよ！」
「なーに、2年長く生きてる先輩からのアドバイスだよ」

千歌ちゃんによると善子ちゃんも
Aqoursに加入することになつたらしい

堕天使設定もそのままでルビイちゃん曰く
ものすごく生き生きしてるとのことである